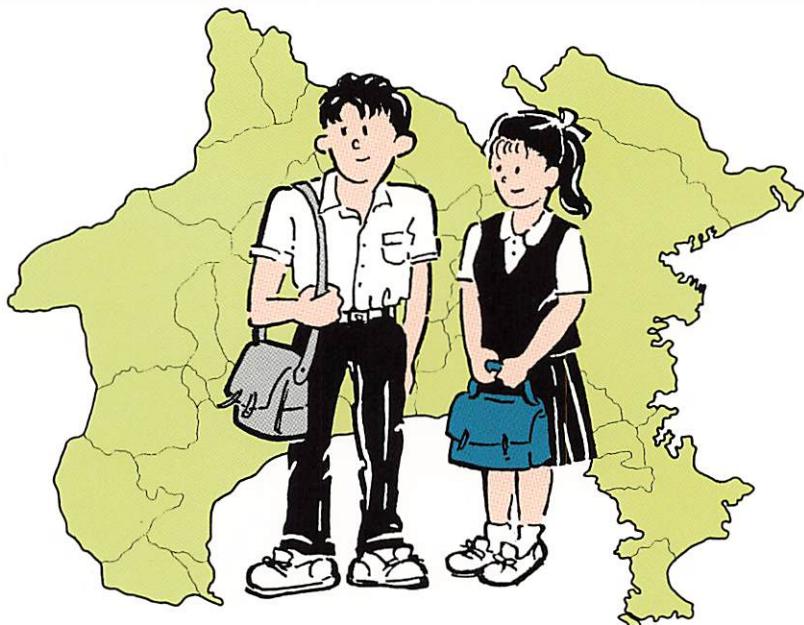


第三回 教文研教育シンポジウム記録

高校教育の現在と未来を問う

——神奈川の入試制度等をめぐって——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・浅井 良雄

(横須賀市立大津中学校教諭)

・竹田 邦明

(神奈川県立藤沢高等学校教諭)

・黒沢 惟昭

(中学3年生の保護者・横須賀市在住)

・筧 惠子

(神奈川大学教授)

・コーディネーター

・広瀬 隆雄

(桜美林短期大学講師)

1993年2月27日(土)

於：逗子市図書館ホール

開会の言葉

○司会（谷口） では、定刻になりましたので、第三回神奈川県教育文化研究所主催「教育シンポジウム」を始めさせていただきます。

きょうは、まだ集まりぐあいがいまひとつなんですけれども、そのうち参加者が増えてくると思します。

土曜日の午後で、まだ花粉も多く飛んでおります中、どうもありがとうございます。
では、最初に主催者であります、当研究所の倉持所長から皆さんにごあいさついたします。

あいさつ

○倉持所長 皆さん、土曜日の午後、大変ご苦労さまでございます。
私は県教文研の倉持でございます。



もう既にご案内のように、全国的には高校の進学率も九五%に達しまして、大学進学率も四〇%に近づいていると、こういう中で、高等学校教育のゆがみと改革ということが強く呼ばれております。

「十五歳の春を泣かせない」という大変古い、古典的な言葉がありますが、その質的いろいろな変化があつたにしても、十五歳の春を泣く声というのはまだ町にかなり満ち満

ちでいるというふうに考えます。

「高校教育のゆがみ」、それから「子どもの心の抑圧」、「人間性疎外の実態」というのが、そこには問題をはらんで横たわっているというふうに考えられます。

現在の高校教育が抱えている問題点というのは、いろいろ言われておりますけれども、要約的に言つて、次の三点が指摘をされると思います。

一つは、進学率が九五%にも達して非常に多様な生徒が入つてくる。その生徒のニーズにこたえ切れない教育内容、あるいは制度、いわゆる画一的教育の問題が一つあると思います。

二つ目には、学校間格差、序列化の問題でございます。

三つ目には、偏差値進学、偏差値教育の問題。

この三つに要約をされるのではないかと考えます。

新聞・テレビなどでも大きく報道されておりますように、現在、社会問題化しております高校中退、あるいは業者テスト、障害者の進学問題、こういったものも、いずれもこの三つが絡んで発生している問題だと認識をいたしております。

神奈川県では、七三年から始まりました、いわゆる「高校新設百校計画」、これが八七年に達成をされておりますが、これは進学機会の確保という点ではかなり大きく評価をされる事業であるというふうに考えます。

しかし、学校間格差を生んできたというのもまた事実でありまして、その辺にいろいろな問題、課題が現在横たわっていると思います。

また、生徒の多様化への対応として、"特色ある学校づくり"ということが推進をされておりますけれども、これにもいろいろな問題をはらんでおります。

神奈川県の場合、高校入試に関係する問題として公立中学校で長年実施されてきた、いわゆるア・テスト（アーチブメント・テスト）、学習検査の問題があります。最近の一連の文部省の業者テスト排除の強い姿勢の中から、この神奈川のア・テストも廃止をされるんじゃないか。こういう声が県民の間にかなり広まっています。

これについては、県の教育長は、去る二十三日の定例県会で「現時点では廃止するということは考えていない」ということを言明しておりますけれども、いずれにしましても、今、こういうア・テスト問題も含めて、公立高校の入試制度等を再検討しております県の審議会、神奈川県高校教育課題研究協議会というのがございますが、これの最終答申が来年三月に出される予定になつておりますが、こういういろいろな、かなり激動しているというか、進行している情勢の中で、この答申を三ヶ月早めて、ことしの十二月中には出したい。こういうような意向を教育長は漏らしております。

文部省の方は、高等学校教育の改革について、九一年の第十四期中教審の最終答申を受けまして、いろいろな施策を打ち出してきておりますけれども、高校教育のあり方を検討してきた高校教育革新推進会議では去る十二日に「高等学校教育の改革の推進について」と題する第四次報告を提出をしました。

その報告では、高校の学科制度を現在の普通科、職業科の一本立てから、双方の科目を総合的に扱う総合学科をえた三本立てとするということを提言をいたしております。

一方、教職員団体の方では、高校希望者全入、高校準義務制というような展望を踏まえながら、当面、定員内全員入学、学区の縮小、総合選抜制等を提起をして運動を進めているという状況でござります。

以上、かいつまんで、ごく要点的に高校教育の問題点とか、改革の方向に触れたことを申し上げま

したが、いずれにしましても、高校教育改革の動きというのは、問題をはらみながらも、かなり大きなねりを示してきているということが言えると思います。

本日は、神奈川の入試制度等を含めて、高校教育の改革をテーマにしたシンポジウムでございますが、それぞれ専門の立場、保護者の立場からのシンポジストのご意見を中心にして、参会の皆様から活発な意見の交流もお願いをいたしまして、実り多い会になりますように念願してやみません。どうもありがとうございました。（拍手）

シンポジウム

○司会 では、早速シンポジウムの方に入らせていただきます。

きょう、コーディネーターということで、専修大学の広瀬隆雄さんに司会進行役をお願いしております。

広瀬さんは、当研究所の研究評議員、そして教育相談員も務めております。では、広瀬さん、よろしくお願ひします。



○広瀬（コーディネーター） きょうは、「高校教育の現在と未来を問う」というテーマをめぐって活発な討論をこれからしていきたいと思います。副題に「神奈川の入試制度等をめぐって」というように入試問題のテーマが載っておりますが、入試問題だけではなくて、今高校が抱えているさまざまな問題について、できるだけ幅広く話し合っていきたいと思います。

シンポジウムに入る前に、本日の大まかな段取りについて説明しておきます。シンポジウムは大きく分けまして前半と後半、二つの部分からなっています。まずシンポジストの方々に十五分から二十分程度お話を聞いていただきます。ひととおり終つたら、休憩時間をとり、その後一時間ほどフロアの方々からの意見なども交えて議論をしていきたいと思います。

それではトップバッターとして、横須賀の大津中学校の浅井さんの方から、高校問題、特に送り出す側の立場からいろいろとお話を聞いていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○浅井（大津中教諭） ただいま紹介がありましたけれども、大津中学校に勤務しております浅井と申します。

司会の方から出口のところというところでまずトップバッターに指名されましたが、中学校に勤務して二十年を超えたわけですが、その中で私自身が感じてきたこと、それから体験してきたことを中心にお話ができればと思っています。

私自身がかつて中学三年を受け持つたときに、これは誰でも体験するわけですが、三年生の後半、二学期から一人一人の子どもがどこの進路を選択していくか。いわゆる進路指導というものが高校を選ぶ、それから就職、進学にするか選ぶ、そういう進路指導に入していくわけです。そこの中でもな

り矛盾したこともやつてきたわけですが、一番担任として感じていたのは、四十名の仲間たちが一年間一緒にクラスの中で生活をしてきて、最後の出口のところで小学校から中学校に来るよう、中学校から高校へみんなで一緒に仲間とともにに行けないという現実だつたわけです。四十人が、それぞれがばらばらに、私自身の言葉で言えば、切り離されて巣立つていく。そういう現実、中にはやはり涙を流しながら進路選択をしていった子どももいますし、さまざまな子どもたちの顔がよぎるわけですけれども、そんなところできょうのテーマである入試制度等をめぐってということでお話したいと思います。

文部省が戦後すぐ、一九四九年だつたと思うんですが、高校における入試選抜はやむを得ない害悪であつて、経済が復興して新制高校に学びたい者に適当な施設を用意することができるようになれば、直ちになくすべきものであるという方針を出しました。

ですから、日本のこれからの中高一貫教育というのは、中学を卒業して、高校に行くときには入試はないんだ。すべての子どもが高校に行けるんだということが国家の方針だつたわけです。当時は、施設の関係で高校の収容数がないということで「やむを得ず」という言葉を使って、入試選抜を行つてきました。

ところが、日本が復興していく中で、経済発展を遂げていく中で、その理念がいつの間にか、これははつきり一九五九年ごろだと思うんですが、法律が変わつて、改悪されて入試選抜を行うと。特別な事情があるときは行わないことができる。今まで入試選抜をすることが特別だつたわけですが、それからはしないことが特別という形で変わつていくわけです。そこからいわゆる適格者主義というのが生まれてくるわけですけれども、そのときに私自身がちょうどベビーブームの世代ですから、私たちのころは進学率はそんなに高くありませんでした。

今は、最初のあいさつの中でもありましたけれども、九〇%を超える時代になつた。私たちにしてみれば、社会が発展して、高校の数もふえ、それなりに教育が進んでいけば、すべての子どもが希望すれば入れるんだという希望がずっとあつたわけですが、現実は逆にどんどん入れなくさせられてきていつているということが言えると思います。

それで一番中学の担任をやつしていく厳しかつたのは、九〇%を超えると言いながらも、一つ一つの高校に格差があつて、その高校に行きたくともいけないという現実が出てきている。それは学校間格差というふうに言われているわけですけれども、もちろん学校間格差というのは受験学力といいますか、そういううところに基づくものでしかないと思うんですけれども、格差が生じた。

神奈川県も百校計画を進めるに当たつて、学区を確かに分割してきたわけです。今、県内は十八学区になつていて、私がいるところは横須賀三浦学区。公立普通科高校が十二校という県内でも最大学区になつていて、その中で十二校あれば十二のランクがあると言われるぐらい格差が生じてきている。

そうすると、四十人の仲間が、どうしても十二、それから職業高校、私立、就職、各種学校というところに振り分けられていくところが一番中学校の教師としてのつらいところだつたと思います。

格差というのは社会のやむを得ない、もうなくせない、どうしようもないものか。高校入試選抜がある限りどうしようもないものかということでいきますと、私自身は全国でいろんな取り組みを聞く中で、制度をつくれば、格差をなくすことができるんだということを、この間実感をしています。そういう意味では今の神奈川の選抜制度は、単独選抜、一人の子がある高校を受けるという選抜制度、これを単独選抜というんですが、この制度についてはまた詳しく後でお話が出ると思いますので、詳

しきは触れませんが、制度を変えれば格差のない、それこそ地域の地元の高校に通うことができるんだということを聞いて、何とかこの制度を神奈川の中でも導入できないかというところで、今考えているところです。

もう一つ、九〇%を超えて、今、最初のごあいさつの中で九五%進学率というふうに言いましたけれども、正しく言いますと、お手元に資料をお配りしたところなんですが、神奈川県は今現在九五%というのはまだなつていません。神奈川県で言えば、九四・何%、これも定時制を含めての九四・何%だと思うんですけれども、それを全日制だけで見てみると、神奈川県は九一%台なわけです。これは全国的に言いますと、下から十番目ぐらいの数字になるわけですね。四十七都道府県の中で神奈川県はかなり低い。

特に私が勤めております横須賀三浦学区では九〇%台という数字になつています。生徒が今どんどん減つてきていますから、政策的に希望するすべての子を受け入れようと思えば、今それだけの施設はあるわけです。これはどうしてこの数字でとどまつているかと言えば、政策的にこの数字にとどめさせてしているわけですね。これを計画進学率と言つていますけれども、計画進学率をここにとどめさせている限り、どんなに高校に行きたいと頑張つても、全日制で言えば、九%の子どもにはどうにも行けない仕組みになつてているというところが今一番の問題だらうというふうに思います。

それが例えは私の学区の中にも「障害」を持った子どもが高校に行きたい、みんなと一緒に地域の高校に行きたいということを願つても、この壁の中ではばまれている。そういう意味ではまず一つは、この計画進学率を人為的に定めることについて、私自身は疑問に思っています。

今、県教委の方でこの計画進学率を引き上げるような形で検討を進めていると言いますけれども、今進め方でいったならば、「希望するすべての」というところにどうもいかない。やっぱりどこかで

線を引いてしまうということが言えるのではないかなと思います。

それをどこまで引き上げていくか。それから希望するすべての子どもたちを受け入れる条件を整えたときに、今ままの選抜制度だつたらば、それはまたすべての格差の中で子どもたちが振り分けられていくですから、格差のない制度をどうつくり上げていくかということが、今本当は県教育委員会に一番求められているのではないかなと思います。

ところが、文部省からのさまざまな政策提言の中で、どうもそれとは違う方向で、もつともつと子どもたちを振り分けていく。例えば単位制高校というものをつくつたり、コース制、いわゆる外国語コースとか、芸術科コースとか、体育科コースとか、そういうコースごとに分かれてつくつていく。ますます子どもたちが振り分けられていく。地域の高校へ通えない状況になっていくことが今一番恐れているところです。

そういうところで私たち中学の教師が手をこまねいて、制度があるからしようがないと言っている限りは、結局は教師自身が子どもたちを振り分ける加害者にならざるを得ない。子どもから見れば、どんなに中学校の中で仲間づくりだとか、それからみんなで団結して頑張ろうとか、クラスづくりだとかやつていても、最後の出口のところで結局は成績によって振り分けられていく限り、それは教師としては振り分ける下手人といいますか、加害者として子どもから見られざるを得ないというところに中学校の教師は置かれていると思います。

私自身は、三浦半島地区教職員組合というところに所属しておりますけれども、せめて制度が変わらない限り、私たち自身が何ができるのかということで、この間取り組んできたことをちょっとご報告したいと思います。

それは、やはりお手元の資料の中に、「地域の高校へ進学しよう」というパンフレットが一枚あると

思うんですけれども、毎年、これを一学期に全中学三年生の保護者に子どもの手を通して配っています。十数年これをやつてきたわけですが、私どもの運動として、三浦半島は先ほど言いましたけれども、十二校というかなり大きな学区ですので、それをまず三つに分割するという案を考えました。

その三つの案に基づいて近くの高校に行こうと。できるだけ遠い高校はやめようということで運動をしてきています。今の制度がある中で、教師一人一人のところにかかわってきますから、大変厳しい運動なんで、そういう意味では何年かかってもすべての子どもが地域の高校へ行かれるようなどころまでいっていませんけれども、徐々に徐々にではあっても何とか地域のところに行こうと、そうやつて格差をなくしていこうということができるというふうには思います。

ちなみに今年度も中学三年生の全在籍生徒数の二〇%以上は地域の高校三校ということを指定して、そこに通わせようということで取り組んできました。二一〇%という数字は大変低いと思われるかもしれませんけれども、全在籍数の二〇%ですから、今、公立普通高校に行ける生徒が五五%ぐらいまでに下がつてきているんですね。これはかつては六〇%を超えていたわけですが、生徒が急減していく中で私立高校の定員は減らさないまままでできていますから、公立高校の定員を減らしてきたということです。今、公立普通高校に五五%ぐらいの子どもしか行けません。その中の二〇%ということですから、それなりにかなりの数字ではないかというふうに思っています。

そういう中で今年度まだ結果は出ていませんから、あくまでも志望者ということで、受験をした生徒ということでいきますと、三浦半島学区の中で三十四の中学校がありますけれども、二十六校から二十七校の中学が二〇%以上地域の高校三校に希望をしている。それから特に三〇%を超える中学校も七八校あります。一番多い中学校は地域の高校三校に三七%ぐらい集中して受験をしています。その三七%というのは、先ほどの公立普通高校に行ける五五%の生徒の中では七〇%近くになるわけ

です。ですから、一つの中学校の中で公立普通高校に行く生徒の中で、七〇%近い子は地域の三校の高校に行つているというふうに言えると思います。

これを一步一步努力しながら、教師の進路指導といいますか、そういう中で子どもたちに訴えていきながら、保護者にも訴えていきながら進めてまいりたいと考えております。

今の現実の中で大変厳しい運動だとは思っていますけれども、息長く続けることで、少しずつでも、一気にはいかないけれども、格差というのはなくしていけるのではないかなどというふうに思います。

その中で中学校のクラスの中でということで、これは私自身の体験でしか言えませんけれども、私が中学校三年生の担任を持ったままで四月に子どもたちにこう言います。「最後にみんなで進路公開ができる学級にしよう」。これは私が中学三年生の担任になつたときの最初に子どもたちに呼びかける言葉です。つまり、進路公開をやろうということではなくて、進路公開ができる学級にしよう。その学級を目指して頑張ろうというふうに言うわけですが、「進路公開」というのは、子どもたちが希望を出して、志願書を出していくときに、まずクラスの中で自分はどこを受けるということを一人一人が発表し合つて、それをクラスのみんなで考えるということだと思います。

それを一学期に一回、二学期に一回、三学期に一回ということで、一学期段階は子どもたちの希望もまだ定まってきていませんから、「俺は何とか高校に行きたいな」という子もいれば、「俺はやつぱりこのままじや多分高校に行けないから就職かな」とか、そんな形で話がいくわけですが、一学期の十二月になりますと、もうかなり絞られてくる中で、それは一人一人が発表する中では、ときには涙を流しながら、「俺は本当は昼間の高校に行きたかったけれども、先生から無理だと言わされた。だから、しようがないから定時制に通いながら塗装工になるんだ」とか、そんなことをみんなの前で発表していくわけです。

そういう中でクラスの子どもたちが、例えば高校に行けなかつた子や、それからのことなどをどう考えていくか。逆に言えば、自分はなぜその高校を選んだのかということを問われてくる。そこで、選んだ理由がただ単に大学進学にいいからとか、親が行けと言つたからという理由では、クラスの仲間関係の中で通用しなくなつていく。やつぱり自分がなぜその高校を選んだのかということを真剣に考えざるを得ないという進路公開をやるわけです。

それで、すべての子どもが地域の高校へ行こうというところにまだいかないわけですが、それを聞いている教師として非常につらいわけですね。結果的には先ほど言いましたけれども、「俺、先生にだめだと言われたから行けないんだ」という話が出てきますから、これはもうまさに私の方が問われているんだなと思わざるを得ません。そういう意味では制度がある中ではありながら、一步一步まず現場の私たち一人一人が何ができるかということを、今一度、今この時期に考えながら進めていくこともできるのではないかと思います。

最後になりますけれども、今、業者テストが盛んに文部省から、もう禁止命令まで出たぐらいに言われていますけれども、少なくとも横須賀では業者テストをやつている学校は少なかつたわけですが、上からとか、制度からとか、そういうところで変わることによつて教師が変わることが、今までの通常だつたというふうに思つてます。今これからは自分たちでどう変えていくか。自分たちで何ができるか。制度や上からのということを待つんではなくて、自分の学級の中で、自分の学校の中でそれから大きく組織、教職員組合としてというふうにつくつしていくことが大事なんだなとつくづく思います。

今、三浦半島教組で一番取り組んでいる課題として、「障害」児の高校入学ということが一つあります。それもやつとここ数年取り組み出しました。まだまだ壁は厚いわけですし、受け入れてくれる高

校の方も定員内不合格という形で、「これだけの定員はとりますよ」という県民に対する約束をしておきながら、結果的には定員の中で落としているという、もちろん高校の教職員組合の努力もありながら、定員内不合格を出さないという取り組みもしている中ですが、まだまだ現実はそういう壁がありますし、もつと言えば、高校の生徒一人一人の中で掛け算九九もできない子がなぜ高校に来るんだとか、それから足し算・引き算ができない子がなぜ高校に来るんだというところの壁も大きくあります。そこを中学、高校と反目し合っているのではなくて、もつともつとお互いが本音を出し合うような討論を深めながら、高校って何なのかというところから出発していくしかないかなというふうに考えています。

もちろん私たち自身の取り組みによることがつかりですので、大変厳しいですし、そういう意味では教師の自分自身の存在も問われるわけですけれども、文部省が今さまざまな高校教育改革なんということを打ち出している中で、一步一步でも私たちの側から進められればというふうに思っています。

ちょっと時間が過ぎたかもしれませんけれども、私としての話をさせていただきました。（拍手）

○広瀬 ありがとうございました。

送り出す側からの問題提起という形で話を聞いていただきました。高校の格差の問題、具体的には計画進学率の問題、それによって子どもたちが振り分けられて、行きたい子どもが高校へ行けないという問題。それからあと組合としての取り組みとか、中三の担任としての取り組みなどについて話していただきました。

さて次は、受け入れる側からの問題提起をしていただきたいと思います。藤沢高校の竹田さんです。お願いします。



○竹田（藤沢高教諭） 藤沢高校の竹田です。

今、中学校の浅井先生の方から話がありましたが、そこを若干受けるような形で高等学校の問題について話をしてみたいと思います。

「高校教育改革」という言い方が今いろいろなところで言われているわけですが、ども、これまで私も含めて日教組というところに結集し、運動してきましたが、戦後の教育改革運動の歴史の中で、日教組の主張というのが通った歴史はほとんど皆無に近いというふうに言えると思います。

すなわち私たちがやろうとしている教育改革というのは、制度改革としてはなかなか位置づかない。ならば私たちは現場を持つてはいるわけだから、この現場の中でできる教育改革というのは何なのかといふところ。ここに展望が出てくるのではないか、そういう意味で少し話をしてみたいと思います。

高校教育改革問題として考えると、人口論、すなわち入選、選抜の問題と、それから高校教育の自身の問題と、こうあらうかと思いますが、初めに入選の問題をちょっと考えてみたいと思います。神奈川の高等学校というのは、今、浅井先生の方からもありましたように、大きな特徴は何かというと、これは何回も言葉が出てきましたが、「学校間格差」というところにあります。

この「学校間格差」の例というのをどういうふうに話をすればいいかということですが、高等学校の先生方はもちろんわかっているわけですが、例えばある学校へ私が行つたときには、その学校の授業の風景を見ますと、先生の方を向いているのは十人ぐらい。残りの三十人ぐらいは横を向いたり、後ろを向いたり、物を食べたりしている。授業中だけど、外でキヤッチボール、廊下で紙でキヤッチボールをやっている子がいる。これは極端な例として聞いていただければいいと思うんですが、冬になると教室にこたつが持ち込まれる。八人ぐらいがこたつに足を突っ込んで授業を聞いている。

パカパカパカツと音がするから何かなと思うと、コーヒーが沸いている。これは現実にある授業風景の一シーンですね。

こういう学校から、先生がしゃべれば、せき払い一つせずに授業が成り立つという言い方をしますけれども、スマーズに進んでいくという学校と、こう極端な例としてあるわけですね。

この「学校間格差」、百六十五校県立高校がありますけれども、こういう「学校間格差」の中で今神奈川の高校教育というのがなされているというふうに言えると思います。

この「学校間格差」はどのようにしてつくり出されてくるかというと、入試の中できれいにスライスされた結果、できてくるということになります。私の住んでいる湘南学区で言うならば、県立普通高校としては十一校ありますけれども、入試の点数で見てみると、大体十点から十二・十三点刻みでスライスされていきます。そうすると、これは一科目当たり二点から三點、漢字一つか二つ。きょう理科の採点の何か新聞に出でていましたけれども、あれは一個二点ですから、一科目当たりその二点で学校が一つ変わる。実はそのぐらいの中身なんだけれども、それが完全にいくと、今言つたような状況の違いというのが出てくる。

そしてもう一つ高校中退問題というのがありますが、高校中退問題で言うならば、神奈川は昨年四千人を少しきつた。教育委は減つたと言つて喜んでいましたけれども、実際には子どもの数が減つてゐるわけですから四千人の中退で、神奈川の特徴というのは、その率自体は全国的に言つて決して高くありませんが、特定の学校に集中しているというところにあるわけです。一校で百名以上の中退者がいる。四十人学級実現という運動をやつてきましたが、とつくに四十人学級はできているというような学校が幾つかある。これを私たちは「課題集中校問題」、全国的に言うと「教育困難校問題」といふうに言いますけれども、「課題集中校問題」ということで取り組んできているわけですが、要は入

選問題、選抜制度の問題、高校教育改革問題を考えいくときに、この「学校間格差」をなくしていく方向で考えていくのか。それとも「学校間格差」は、これはもうしようがない、一昨年の四月の申教審答申はこの「学校間格差」はしようがないと言つてはいるわけですね。日本の教育において、いい役割も果たしてきたと言つてはいるわけですね。それは何かといつたら、みんなが高校に行ける。みんなが高校卒業になつたと。そういういい役割があつたんだと、こういうふうに言つてはいるわけです。この「学校間格差」をなくすのか、温存していく、より正確、より公平に輪切りをしていくのかといふところで、もう議論の立て方が違つてしまつやうわけです。

今、ア・テストを入れるか入れないかというふうに言つてはいますが、「学校間格差」を残したままでア・テストを入選として使うのか使わないのかという論議をしたとしても、それは「高校教育改革」という視点から言えば余り大きな意味を持たない。それは中学生の受験負担という点での論議にとどまつていて、高等学校教育のあり方そのものについての改革の論議にはつながつていかないだろうと、いうふうに私は思います。

ですから、高校間格差を解消していく、というふうにするならば、これは「学校間格差」がなぜ残つてはいるかを見なければなりません。それは「学校間格差」に対する幻想があるわけですね。すなわち一つの価値をそこに見出すわけですから、例えば大学進学というのを一つの価値基準に置くならば、大学進学ということを考えると、「学校間格差」で分けて、大学進学の可能性のある子はそういう子どもたちだけ集めて、より効率的に勉強させれば、いい大学に行くだろう。こういう幻想があるわけですね。それは幻想だというのは黒沢先生が教育総研の本の中で全国状況から分析していらつしやいます。それはまた皆さんいつか読んでいただくとして、決してそんなことはありませんよということを、大学進学という一つの問題をとつたとしてもありませんよということを黒沢先生はおつしやつてはいる

わけですが、そういう「学校間格差」の幻想を打ち破れるかどうかということはありますけれども、この「学校間格差」というのを解消する方向をとるのかどうかという議論が一致できるかどうかが一つの大きな課題だらうと思います。

私は、もう今、九十何%という進学率になつているということを考えれば、これは「学校間格差」をなくしていくという方向で進んでいくべきだ。すなわち高校教育改革というのを「子どもたち」というところを視点にして考えれば、当然そういう結論を出さなきやいけないだらうというふうに思つて いるところです。

もう一つ、高等学校というところを、この議論をしていくときに、「適格者主義」という言葉がありました。が、適格者主義という立場に立つか、希望者全入という立場に立つか。義務制という言い方もありますけれども、義務制だと小・中と一緒にで、みんな必ず行かなきやならないと、こうなるわけですが、そこはとりあえず置いておいて、希望者全入という立場に立つか、適格者主義という立場に立つかということで、答えの出し方、これまた変わつてくると思うんです。

この適格者主義というのは九一%全日制。実質上は九二%近く実績としてはありますけれども、この九一~九二%という全日制、その他定・通合させて九五~九六%という中で適格者主義を言つても、これは実は実際上は意味は持たない。適格者主義という中で切る口実というのを与えて いるわけですが、実際には例えば四十五人学級だつたら入れたけれども、四十四人学級になつちやつたから入れなかつたと。「四十五人だつたらおまえは適格者だつたんだけれども、四十四人だから適格者じやない」。こういう論理は成り立たないわけですから、そういう点で言うと、もう今や適格者主義というのは破綻しているはずなんだけれども、現実にそこには私たち教職員の意識も含めて残つて いると言わざるを得ないわけです。



この適格者主義ということに基づけば、これは先ほど言つたことと同じになりますが、どのように公平に、どのように正確に、どのように正しく適格者を選ぶかという議論になるわけですね。希望者全入という立場に立てば、これまた違うやり方がいろいろ出てくるだろうというふうに思います。

私は自分の教えているクラスで、藤沢高校は女子ばかりですが、四十数名の生徒にどういうふうに入学選抜試験、高校入試というのはあつたらいいかと、質問しました。昨年の九月のことなんですが、もう生徒は簡単に言いますね。「抽選」ですね、「抽選」。希望校を三校書く。その三校の中から抽選でやつていくということですね。これはほとんど全員一致して抽選方式ですね。

朝日新聞の記者にその話をしたら非常におもしろがっていましたけれども、記事にはならなかつたところです。希望者全入に立てば、これはいろんな入選方法というのが生み出せるというふうに思います。それは小学区制というふうに言う場合もあるだろうし、総合選抜というふうに言う場合もあるだろう。

し、抽選方式という場合もあるだろうし、要は前提として希望者全入に置くのか。何%という数字を切った適格者主義に置くのか。そこをどうするのかというところに論議としてはあるだろうと思います。

私自身の気持ち、考え方というのは、もうこれは希望者全入でいくべきだ。進学率は、これは上がるのか、下がるのかわかりません。結果的に、例えば生涯学習体系ということが今言われていますが、高等学校のあり方として、そういうものの一環として、位置づけるというのも一つだとするならば、これは進学率が必ずしも上がるとは限らない。スウェーデンなんかの例を見れば、いつとき進学率は下がりますね。また学びたいときに高校へ来る。こういう形になるわけですから、進学率自体は問題にならないというふうになると思います。

ただ、これは一つの大きな制度改革になりますから、なかなか進まないということになります。希望者全入、抽選方式というふうに私がここで幾ら言つても、今の高課研の中ですごう結論が出るかと言えば、これは出ないです。

そうすると、先ほどちょっとと言いましたが、我々が現場の中でできる、最低できるのは何かと言えば、今できるのは、この「学校間格差」をなくしていく一つの方法、希望者全入に近づけていく一つの方法として定員内不合格を出さないということですね。

実は、今こういうことを言うとちょっと怒られちやうかもしませんが、三浦半島地域ではない、県の地図を書くとちょうど対角線に位置するような地域では、「この生徒はとらなくていいですから受けさせてください」と。こういう話は現実にあるんですね。それは例えばスライスをしていて、この学校A高校はこの点数、B高校はこの点数。こうなったときに本校中学校側としてはB高校を勧めたい。しかし、その本人が家が近いからとか、またいろんな事情でA高校を受けたい。こういったと

きに、A高校に受かっちゃつたら中学の進路指導というのはやりにくくなっちゃうわけですね。だから、「落としてもいいですよ」ということを現実に言つてくる。こういう事例があるわけですね。

高校側はどうするか。その生徒を受け入れちゃう。受け入れちゃえば、これは「学校間格差」が構造として少し変わつてくるきつかけになりますよね。こういうことをやってみることは我々自身でできるわけです。

こういうふうにまず定員内不合格を出さないというような方向を我々自身がつくり上げていくことは、そしてその中から「学校間格差」というものを崩しかけていくということは、我々自身の運動の中ができるのではないかというふうに考えているわけです。

これは私たち自身の、教職員自身が持つていてる適格者主義だとか、そういうものについて問いかけていくことになりますから、なかなかそう簡単に進まないかも知れないけれども、そういうところを一つ取り組んでみるというふうに考えているわけです。

今度は少し高等学校教育の中身の方に入りたいと思います。『あるべき高校像』ということをどのように考えるかということですけれども、『あるべき高校像』を高校教師だけで考えていたら、これはろくなものにならないというふうに思います。

高等学校というのは、先ほどからも「地域に開かれた」云々という言葉がありましたが、教育を教職員集団だけでつくっているということは、これは決していい方向には進まないだろうし、親なり、地域なり、きょうは学者先生方もいらっしゃっていますから、そういう方々との知恵の出し合いといふふうになるんだろうと思います。

ちょっと古くなりますがけれども、臨教審というのがかつてありました。このきつかけになつたのが、中曾根さんが言う『戦後政治の総決算』。教育で言うと、この臨教審が『戦後民主教育の総決算』にな

るわけです。

戦後民主教育というのは一体何だったんだろう。これは大学の研究者がいろいろおやりになつてゐるところでしょうが、私自身としてどうとらえているかなどと、一つは憲法の問題があると思います。戦後民主教育のよかつた点というのは何なのか。この「憲法」というところに柱があつたということだらうと思います。

今、ご承知のようにさまざまな動きが出てきている。これはみんな改憲の動きにつながつていく。教育の場面で言いますと、戦後民主教育の柱と言っていたのはホームルーム活動、生徒の自治的な活動ですね。それともう一つは社会科です。これを見事に解体しました。社会科の解体というのは、学習指導要領で変わり、免許法で変わり、というふうになり社会科はもう完全に解体をした。

もう一つはホームルームの解体。すなわち生徒の自治的活動を解体する。この生徒の自治的活動を解体するというのが単位制高校という姿になつてあらわれてきていると、私は思います。

この単位制高校は生徒の自治的活動というのがなくて、ただ単に単位をそろえればいい。単位をそろえれば高等学校卒業という資格を与える。こういう姿として出てきています。

これはとりもなおさず今の日本の平和憲法体制を教育の面から崩していく一つの動きと言えます。ならば、我々はもう一回そこに足を置いてみて、そしてそこで今の高等学校教育のあり方というのをもう一回つくつてみる。こういう姿を追求しなきやいけないんじやないか。

単位制高校の問題や、コース制の問題というのがいろいろ出てきていますし、総合学科というのも出てきました。実はこれは臨教審のもう一つの姿である「安上がり教育」、民活化というようなところとつながつてきている話だらう思います。

ここは黒沢先生と意見がぶつかるところかもしれませんけれども、例えばさまざまなかつての技

能連携等の問題や、他の教育機関、学習機関における単位の認定の問題というのがありますけれども、これは行政が金をつぎ込まないというところから出てくる一つの姿というふうな面で押さえておく必要があるだろうと思います。

もちろん我々がその部分を使って、新しい高校教育像をつくり上げていく、一つのやり方にするという、そういう運動の形態としては必要だろうというふうに思っていますが、今いた点はきちっと私としては抑えておきたいと思っています。

いずれにしても制度の問題というのがあるわけですが、もう一つ教職員の意識という問題、そして親や社会の意識の問題があります。その中に子どもが置かれてなきやいけないということは、これは当然言わざもがなのことですが、私たち教職員自身がなかなかそこに目がいかないという弱点を持つており、率直に反省をせざるを得ないと考えています。

では、高等学校の、先ほど言つた単位制高校や、総合学科というような中で、どういうところを我々としてはとらえていけるのかという点で言いますと、高等学校は現在、卒業単位としては八十単位という言い方をしています。八十単位そろえれば卒業できる。しかし、各学校では八十単位で卒業できるという姿にはなかなかつてない。例えば私は生物の教員ですが、私の生物を落としてもその他で八十単位になればいいですから、二学期の途中から私の授業をやめちゃうかもしれない。これは私にとつてみると大変つらい。途中で生徒の数が減つてしまつたり、もういいやということで投げ出されてしまつたり、これはなかなかつらい。

そういう点で言うと、高等学校側が素直に「八十単位そろえればいいですよ」というふうに子どもたちに言い切れない。ところが、文部省の方は積極的に八十単位で卒業できるような弾力的な高校像というような言い方をしていて、我々はそれに負けています。そういうところは積極的に検討し

でいくところだろうというふうに思います。

それから総合学科なり、コース制なりというような言い方で出てきていますが、私たちはそこで言っている大幅な自由選択制、そこは積極的に我々としては使っていけるだろう。ただし、県教育委員会がその方針に基づいて、総合学科高校なり、新しいタイプの高校なりをどんどんつくるかと言えば、新構想高校を一校つくるのに今までつくれてきた高校の四校、五校分の金がかかるわけですから、恐らく一校しかつくりませんね。

総合学科構想というのをどういうふうにするかわかりませんけれども同じでしよう。そうなると、特定の学校だけに金が注ぎこまれて、他の百六十五校の多くは置いていかれる。百六十五校が抱えているさまざまな問題点については金をかけないで、そういうところだけに金をかけていく。こうなつていく可能性があるので、私たちは危険視をしているということです。今言った、大幅な自由選択制、それがいいというならば、既設百六十五校で大幅な選択制ができるような条件整備、こういうものを我々としては追求をすべきだというふうに考えているところです。

時間が来ましたから、また後ほど後半の部分で若干補強できるところがあれば、補強させてもらいたいと思います。

以上です。（拍手）

○広瀬 ありがとうございました。大きく分けて二つほどの問題点が指摘されました。

一つは、高校間格差の問題、あるいは適格者主義か希望者全入の立場をとるかという問題です。

もう一つは、今いろいろな新しいタイプの高校が続々とつくられているが、そういう動きをどのようにとらえるかという問題です。

次は、保護者の立場から高校問題について、お話を聞いていただきたいと思います。

中学三年生のお子さんをもつ寃さん、よろしくお願ひします。



○寃（中三保護者） 寃です。

私は働いている母親です。我が家には女の子が一人おりまして、ことし高校受験しました。三日に発表ということで何も手につかないという状況にあります。といいますのは、大変お休みが多かつたし、勉強が余り好きではなかった。その二つの条件で母親としても、父親としても非常に心配な状況にあります。

何でお休みが多かつたかといいますと、仲のよいお友だちがお休みが多かつた関係で、一緒にお休みしていて、私自身「学校」というものは行くべきもんでしょう。だから、行きなさい」と言いますんですが、「つまんないもんね」ということが表面的な言葉としては出てきています。そのお友だちは、学校へは行かずには我が家へ来てうちの子とCDやビデオでロックをきいてる。そのあげく高校へは行かない、美容師になる。と言いますが真剣さはみじんもありません。

いずれにしましても父親と母親としましては、今おっしゃられましたように、九十何%高校に進学する時代だし、高校に進学させられない経済状態でもないんだから行つてほしい。中学を卒業して、自分の人生を決めるんではなくて、高校を卒業してから自分の人生を決めてもいいんじゃないかと父親が言つて、それを納得して高校を受験したという状況にあります。

それはそれとしまして、私自身の教育全般に対する考え方は、教育のプロでいらっしゃる先生方とは全く違つていまして、要するに今いろんな学校間格差とか、受験の制度とか、あるいは塾とか、そういう存在があるのは、そもそも元凶は大学受験にあるんだと思いまして、大学受験がなくなればいいというのが私自身の考え方なんです。

いろんな大学があつて、それぞれの大学が特徴を持つて、指導力のある大学の先生がいらっしゃれ

ば、子どもはどこの大学へ行きたいかということを自分で選択して、そこに無試験で入れていただいて、そこで本当に勉強して、勉強すれば卒業できる。勉強しなければ卒業できない。それでいいのではなくいかという気がするんです。そして高校は中学と同じように、学区をきめて、そこへ皆で行くことにする。そうすれば高校受験で、私の子どもとは違つて、とても勉強をなさるお子さんのお母さんが、「本当はあそこへ行きたいんだけども、輪切りをされてしまつてあそこへ行けないんだと言つてぐずぐずしているんですよ」とおっしゃることもなくなる。お母さんが言うのは「ア・テストのときには頑張らなかつたんだからしようがないでしょう」。ところが、ア・テストというものは、中学の勉強は小学校の勉強とは違つんだという認識がようやくできかけてきた頃に、またまたがつた勉強のしかたを強要するから、先生も子供も親もふりまわされてしまい、にもかかわらず、大多数の子供達は要領が悪いから塾がのさばり、選別のためのベルトコンベアにのせられてしまう。

そういうことがあるのは結局大学受験が一番いけないんだから、大学は全部入れてほしい。そうすれば、大学の先生も怠けていらっしゃる先生とか、あとは医学部ですと余りよくないことをなさる先生とか、そういう先生とかはなくなるのではないかというふうな考え方を持つています。

それから小学校のときにもうちの子どもを教えてくださつた先生の中に、自由勉強の時間というものを持つてくださつた先生がございました。私は大変それはいいと思っていたんですが、お母さん方に評判がよくありませんでした。「あの先生に持つてもらうと成績が落ちるからダメなんだよね」「あの先生は学校からいなくなるといいね」というふうな、ちょっと違つんじやないかなあと感じたことがありました。

それと同時にうちの子どもの場合、「つまんないし、わかんないもの」ということから、私自身は今の中学校の先生に一生懸命やつてくださいと申し上げたいけれどちょっと申しわけないんじやないかな

とも思うんです。

つまり、むしろそれは小学校の先生がきちんと教えていてくだされば、中学校へ行つてそんなことはないんじゃないかなと考えたんですが、「待てよ。小学校の先生にそれを押しつけるのも無理ではないか」教科書は子供の発達にあわせて作られているのだろうか。指導要領はどうなんだろうと、その辺が疑問になりまして、小学校の先生も、中学校の先生も、高校の先生も、何とも攻撃的にはしきれないという、そういう状況になつてしまします。でもやっぱり子どもが勉強していないと気になりますし、働いている母親としては、一生懸命教えてやるといふこともできません。子どもが小学校に入るあたりで、長洲さんが希望する子供は全部行けるように高校を新設するということをおつしやりながら、高校をたくさんおつくりになつていらしたので、余り勉強、勉強と言わないできました。うちの子どもは何かこちよこちよ書くのが好きですかから色鉛筆、絵の具、紙だのを十分与えて、それを教育費だと思つておりますが、塾にやるという教育費は使つてこなかつた。中学生になつてから塾に行きましたが、時すでに遅しでした。そしていま子どもが高校受験になつたら、希望する子どもが全部ではなくて、何人か落ちるような仕組みになつているということを聞いて、もはや何ともできない。遅かつたな。もつと早くからそれじやハッパをかけねばよかつたなと今思つても、どうも間に合わないという状況です。

ただ、そういう子どもではありますけれども、私と子どもの会話はいつも成立していますから、ある日突然社会の中で脱落していくような子どもではないという確信はあります。勉強はしていませんし、好きではありませんし、できません。そういう状況の中でお招きをいただいて、こんなお話をしたいのかと思いながら、これで終わらせていただきます。（拍手）

○広瀬 ありがとうございました。

受験競争の一番大きな原因は大学受験の存在であるということで、大学受験をなくした方がいい。

それからあと、お子さんについてふだんは余り勉強をしないお子さんの受験を通して、高校受験が全員入れないという状況を初めて切実に身にしみて感じたというような事柄についてお話ししていただきました。

次は、最後になります。今まで三人のシンポジストの方々の話を受けて感じたことでもいいし、それから現在高校をめぐつてどういう問題が大きな焦点になつてているのかといった一般的なことについて、神奈川大の黒沢さんの方からお話をいただきたいと思います。

○黒沢（神奈川大教授） 黒沢です。よろしくお願ひします。

只今、コーディネーターの方から、今までの話を受けてということですけれども、うまく受けられるかどうかわかりませんし、違った意見も言いそなうので、その点、ご了承ください。

まず第一に、文部省が次々といろんな改革を出しておりますね。本日のテーマに即して言いますと、高等学校の改革が次々と出されています。一体これはどういうことを意味しているんだろうか、私もちょっとわかりかねているんです。わかつている人がいたら教えていただきたいんですが、ただ、ある研究会で、新聞社の論説委員だった方がやや揶揄的に言われたことをちょっと紹介します。

一つは、生涯学習時代になりました、学校教育、社会教育も含めてですけれども、文部省の権限が低下しました。そういうことが一つあると思うんです。ほかの省がどんどん権限を取つていつちやたのです。臨教審が出きたときにも、文部省が一番対応がおくれた省なんだそうですね。それからもう一つは、日教組の方の変化に対する文部省の関係もあるんじゃないだろうかというご



意見でした。今まで日教組がいい意味でも、悪い意味でも——と言つては恐縮ですが——戦闘的で、それを何とか「退治」しなきやいけない。そこに文部省の存在価値の一部があつたんですけれども、日教組の方が今「参加・提言」というふうにスローガンを変えてきましたので、何かそれに対してもさないと文部省の存在価値がなくなつてしまつのではないかと考えて、いろいろな提言を出しているのではないかという意見なんですね。私もそういう状況の変化はあるんだろうと考えております。

特に最近「業者テスト」に対する強い批判を文部省が出しました。これは私の今考へていることから言いますと、非常に注目すべきことじやないかと思うんです。それについて批判もありますが、鳩山文部大臣が「鳩の一聲」かなんかで批判をする、それによってかなり現場がいろいろ動いている状況がありますね。あれはスタンドプレーじやないかなんて言われたんですが、今度は少し違うと思います。つい最近新しい文部大臣がまたかなりしつこく言い出しているということは、どういうことを意味しているんだろうかな、と私自身考へているところです。果たして本気で偏差値の教育体制というものを打破することを文部省は考へているんだろうか。もしそうだとすれば、私はそれなりに歓迎したいと思います。まさに「参加・提言」という文脈からいえば、我々なんかとも一緒に考へるような状況が出てきているんじやないだろうか。ちょっと甘いかもしませんけれども、そんなふうな感じがします。

それで、今偏差値の問題を申し上げましたけれども、この偏差値というのは非常に悪いものだと批判する人がいますけれども、なかなか深い根がありまして、簡単にダメだと言つていたんではなくならないだろうと思います。私が考えますには、今日日本の国家を、あるいは社会をどういうふうに規定したらいいだろうかといいますと、いろんな説明があるかと思いますが、経済学者の分析を援用させていただきますと、「企業國家」とか、「企業社会」という規定が説得的です。

今、覧さんが大学の問題を出されましたけれども、その背景には社会、端的に就職の問題がありますして、それを支えているのは日本の「企業國家」だろうと思います。その企業國家のことを詳しく述べる時間がないんですが、私の調べたところでは、企業の、特に大企業が要求している資質が、まさにこの偏差値によつてつくられる人材養成と非常に整合性があるのではないだろうかこう思うのです。

私の用意しました「レジュメ」を御覧下さい。

簡単に言えば、大企業が求めているのはフレキシビリティーと申しますか、色々な事態にうまく適合するような人材を求めていたのだと思うんです。あることに、ある技能にだけ有能である必要はないともいいんです。むしろさまざまな状況にうまく適応できるジェネラリティーといいますか、そういう資質を企業は一番求めていたんですね。『フレキシビリティー』という言葉が適切だと思いますが、それがまさに偏差値を上げるという小さいころからの学力の向上と非常にマッチしているということです。

例えば一つの例として東大の合格者をとりましよう。これは一つの象徴的な例ですけれども、ふつうの程度の才能のひとが東大に入れたということは、小さいときからコツコツと不得意科目をなくす努力をしているんですね。家庭の文化的、経済的な力（環境）も重要です。そして困難を乗り越える本人の頑張り、これも大切ですね。それを可能にする体力も含めて。そしてついに目的を完遂したという、その自信。そういうものを一番大企業では求めているのではないでしょうか。

こういう関連が事実としてあるだろうと思うんです。だから、日本を支えているのは企業國家であつて、しかも、その大企業が求めていた人材と、偏差値によつて形成されてきた人材がマッチしているとすれば、これは簡単に変えられないだろうというふうに私は思うんですね。

文部省がそれと違つたやり方を今出そうとしている（「業者テスト廃止」！）のはどういう意味があ

るんだろうかということを、私としてはまだ説明できていないので、もしきょうの討論の中で解明されれば、非常にありがたいと思うんですが。とにかく今そういう状況がありますから、偏差値体制というものは簡単にはいかないでしよう。

しかし、この偏差値体制の中で、どういう教育の病状が出てきているかということを申し上げたいと思います。これは大ざっぱに言えば、一方に少数のエリートと、片方に非常に多くのノンエリート。この定義もなかなか難しいんですけれども、二極分解が起こっていると、こう思うんですね。もちろんエリート、リーダーは必要だと思いますけれども、このエリートは小さいときから偏差値の競争に耐えてきた人々ですから、エリート以外の人々について無関心、無自覚な面があると思います。

つまり、一方にノンエリートの大群がいて、どんな思いをしているかということはほとんどわからぬのです。わからうとも思っています。ですから、それほどに自分が傲慢である、あるいは冷淡であるということさえもわからないのです。私も二年ぐらい前ですけれども、東大の学部と大学院に講義に行つたことがありますけれども、本当に教えやすい学生が多いですね。わりかしおとなしくてよく勉強して、そして家庭環境もなかなかいいらしいんですね。ですから教師としてはある面では楽なんですねけれども、そういう人たちの中には、果たして、例えば高等学校の、先ほど竹田さんがちょっとと言われた課題集中校なんかで苦しんでいるような、そういう状況について全然わからぬだろうと思うんですね。

一部の私の例だけでは申しわけありませんけれども、図式的に言いますと、非常に傲慢な、傲慢ということもわからぬようなエリート志向の若者と、それから一方には分限意識ですか、「どうせ俺はこのぐらいなんだ」という、偏差値によって配分された多くの人々、そこではあきらめとシラケが一般的です。こういう状況が出ているのではないでしようか。

次にやや具体的に申しましよう。まず偏差値向上運動があります。これは神奈川の場合には受験産業が近くに多くありますから、それほど目立たないかもしれませんけれども、鹿児島なんかに行つて聞いてきましたところ、ものすごい状況です。公立高校で朝から夜まで、夜までとは言いませんが、夕方まで、ほとんど半強制的に学力向上運動という名の偏差値教育が行われているんですね。

この間、ある資料を研究会で見せてもらいましたけれども、これは熊本でも、沖縄でも一般的に行われています、どういうふうに勉強すれば学力が上がるか、偏差値が上がるかというノウハウが職員会なんかで閲覧されているんです。しかも、「補習授業」という名の学力向上運動に二日休めば保護者を呼び出すということです。やりたい人がやっているんならそれはまあいいと思うんですけども、全員、ほとんど強制的にやっているんですね。しかも、かなり支持している層がいるわけですね。だから、わりかし安心してできるという状況なんです。そこで人権意識とか、そういうような問題が希薄です。締め



つけがあるんで不登校もふえています。それから教員のオーバーワークなどが問題になつてゐるとうことを聞いてまいりました。

二番目には、進学校のもう一つの極には「課題集中校」、神奈川県ではこう呼ぶんだそうですがそれとも、いわゆる「底辺校」とか、「教育困難校」と言われてゐる現状。これはもう今さら私が言つまでもなくて、普通の意味の授業がほとんど成り立たないのですね。しかも地域からはきらわれて、教師もなるべくそんなところへ行きたくないという状況ですね。それから家庭的にも非常に授業料滞納が多い。こういうような報告を受けております。だから、授業、地域、家庭、教師からも疎外されているといいますか、こういう実情です。

三番目は、高校進学が九五%に上がつてゐますから、ほんのわずかな中卒者に対する、言われなき差別ですね。本当は中学卒業の学力で充分な職業についても、今ではほとんどが高卒以上の学力を要求してゐる条件がありますね。これはむしろ学力を求めるというより、今これだけ進学が上がつてゐるときに高校に行かないというのは何かおかしいんではないだろうか。問題があるんじやないだろうかといふいわれなき偏見からきているのだと、私は思います。

四番目は太学についてです。今筑さんの方から出ましたので、後でちょっと自分のことと言わなきやいけないんでありますけれども、少なくとも文科系に関しては『レジャーランド化』してます。これは大企業が自分のOJTと言われる企業内の技能訓練で間に合つてゐますから、大学はいわばウイスキーかワインみたいに寝かしておく時間だ。熟成を待つてゐる時間なんだ。こう言つてゐるわけです。もしそうでなければ企業は高等学校から直接採つてしまえばいいわけです。これはある教育者が言つたのですが、「なるほどな」と思いました。

最後は、地域格差というものが非常に拡大し広がつてゐることです。神奈川のような大都会では考

えられないような離島僻地、山間僻地の教育が今も現存しております、そこでは色々な格差のなかで教育が行われています。

以上の「病状」はやっぱり偏差値体制に起因します。その背景には大企業があるわけですね。こういう構造があるだろうと思うんです。ですから、これを何とか変えていくという運動を起こしていくことと並行して教育改革というのはやつていかない、教育の中だけでやれなんて言たつて、これは無理だろうと思うんですね。それはやらないよりはいいでしようけれども。

これについてどういうふうにやつたらいいのかという妙案は、今持ち合わせはありません。これがあれば今ごろこういうところで話をしているあればないだろうと思うんですけれども(笑)、やっぱり何か考えなきやいけないと思います。

それでは企業は万々歳だろうかというと、必ずしもそうではありません。経済学者なんかの分析によると、日本の大企業の共同社会、同質性というのは、大企業の正社員、しかも、男子社員に限られた非常に差別のある社会であつて、そこからはじき出された、特に「主婦」と言われている女性に対する抑圧といいますか、負担をかける限りで保たれているのです。

そこから「市民社会」の喪失をともなっています。健全な地域活動がほとんどできない。大企業の人々はほとんど出てこないじゃないですか、地域活動の場に。それから政治運動とか、主権者としての活動領域がほとんど失われて、いわば企業の中にのめり込んでいるという状況があるわけですね。ほかに国際摩擦といろんな批判が出ていることは周知のところです。

それから市民生活だけではなくて、家庭の中でも対話がなかなかできない。今離婚すると、退職金が入らないから定年まで待っていて、そして「はい、さよなら」とパートナーからいわれる。定年離婚ですか、そういう家庭がかなり大企業の中でかなり問題になつてきているんですね。こういう状

況があるから企業は必ずしも万々歳ではないのです。

そういうわけで大企業の、日本の企業王国を支えてきた、プラスの要因が今やマイナスに転化しつつあるということが、企業国家を変えていく、そしてそれによって教育改革も並行していく一つの可能性があるんじゃないだろうかと思いません。

ちょっと話が教育改革から外れておりますけれども、レジメに書いたのは、私が常日ごろ考えている改革の焦点で、これは今お三人の方が話されたことと若干関連するかと思いますので申し添えます。一つは、「下手をする」と「格差をそのまま認めちやうようになるかもわからせん」。そういう恐れがありますけれども、各国を見ますと、例えばドイツの教育などは十歳ぐらいから、いわゆる「選別」していきますよね。職業を選んでいく人と、それから大学に行く人の選別が十歳ぐらいの段階で一まずやつていっちゃんんですね。それがいいかどうかは別としまして、日本のように全部が普通高校へ行つて、それから大学へ行くことを目標とするような、そういう傾向は果たしていいんだろうか考えてみる必要があります。その前提上に組み立てられたライフスタイルを批判的にとらえなおして、教育改革というものを考える必要があるんじゃないでしょうか。

生涯学習というのはいろいろの批判もありますけれども、そういう意味から生涯学習なんかも考えていく必要があるだろうというのが、私の基本的なスタンスなんですね。

もうちょっととスローガン的に言いますと、エリートは確かに必要だろうと思うんですよね。しかし、それを傲慢なエリートにしないで、チェックする必要があります。そのためにはどういうことが必要かというと、ノンエリートが自立して、自覚的なノンエリートになつていくことだと思います。そういう改革の方向というものは出せないだろうかというふうに私は考えているんです。

もうちょっととはつきり言つちやうと、今、大学の進学がふえています。これはこのまま七割、八割

になるとはちょっと思えないんですね。私の考えではですね。やはり六割ぐらいは高校を出て就職していくわけですから、そういう人々がシラケた気持ちに、悲しい分限意識にならないような何かそういう改革はできないだろうか。こういうふうに思つております。

なぜこういう状況が起こってきたかというと、日本は戦後になつて階層の平準化というのが非常に進んだと思うんですね。少なくとも誰でもが中流になれるという、幻想が非常に強いわけです。幻想という言葉はちょっときついかもしれませんけれども、少なくとも意識としては、階層の平準化という傾向はやはりあるんですけれども、現実の職業としてはそれはないんですね。やっぱり恵まれた職業が非常に少なくて、圧倒的に余りよくない、分のよくない職業がピラミッド型に現存しているわけですね。

この職業への配分を戦後の社会は公平にしなきやいけないということになりました。公平の方法は何かということが問題です。そして戦前のように身分制にはできませんから偏差値によつて行う。そしてこれは一定の支持を得ているわけですね。ここら辺に大きな問題があるだろうと思うんです。

すまみせん、あと二分ですか、ポイントだけお話しします。私は、やっぱり格差の是正については、中学区規模の総合選抜制の実現ということを従来から申し上げております。小学区が理想かもしれません、かえつて地域のいろんな格差が出てきちゃうんじゃないだろうかということです。

それからこれは先ほど浅井先生がおつしやつたように、制度ができるまで待つというんじやなくて、地元高校に進学する運動をすすめながら、しかも、中学と高等学校を切り離さないで、中・高一貫制の中等教育を自主的につくつしていく運動をやつたらどうだろうかというふうに考えているわけです。これが一つ、制度的なことなんですね。

もう一つは、カリキュラムです。今、必修が三十五単位ぐらいですかね。それ以外が選択ですから、

それをもうちょっと組みかえて、さつき言つた、ライフスタイルを批判するような、そういうことに転換できる可能性はないでしょうか。そんなふうに考へていてるわけです。

例えば社会的な「弱い」立場の人の弱者に対する共感を生み、増大していくようなカリキュラムがつくれないでしようか。ボランティア活動とか、場合によつては企業の実習とか、この高等学校を出れば、どういうところへ就職できるかということをありのままに示して、そしてどういう職業につけられるのかもキチンと示す。そしてその職業の現実はどうなつてゐるのか。そこの労働組合はどうなつてゐるのか。そういうことを全部知つた上で、本当にあなたはそこへ行くのか。そういうようなことをきちつとやるような、そういうカリキュラム編成というのはできないだろうかというふうに思います。最後に、先ほど生涯教育のことを言いましたけれども、高等学校を三年に限定する必要はないんじやないかと、私は從来から思つてゐるんですね。スウェーデンなんかでやつてゐる、アダルティフィケーション、成人教育化ということです。極端に言つたら、生涯にわたつていいじゃないか。行きたいときに行つて、そういうよくなりカレントシステムをつくつてやれば、中退者はなくなつて、「単位未修得者」というふうになつていくんじゃないでしょうか。これはちょっとユートピア的でしけども、そういうことも考へていいんじゃないかなと想ひます。

時間がオーバーしてしまつまして、申しわけございません。（拍手）

○広瀬 ありがとうございました。

ただいまの黒沢さんの問題提起は、文部省が偏差値教育の打破ということでいろいろ取り組んでいはれども、本当なのかどうか。そして本当に偏差値というのはなくすことができるのか。黒沢さんは大企業の人材要求との関連で、なくならないだろと指摘されました。それから教育の病理の問題あるいは改革の方向性についていくつか指摘がありました。

四人のシンポジストの方々にいろいろとお話を聞いていただきましたが、まだまだ時間が足りないと思っています。シンポジウムの後半ではフロアからのいろいろな質疑応答などを交えて、足りない部分を補足していきたいと思います。

とりあえず今から五分間休憩とり、三時三十分から開始することにします。

―― 休憩 ――

○広瀬 これから後半部分に入つていきたいと思います。前半では四人のシンポジストの方々の話を伺つたわけですが、フロアの方から、四人の方々に対する質問でも、あるいはご意見でも構いませんから、何かあれば積極的に出していただきたいと思います。

質疑応答

○――（保護者） 私は、いわゆる点の取れない子どもの親なんですけれども、五年前に高教組の執行委員長の方と、点の取れない子でも高校に入りたいという話をしました。そのとき「その話は五年早い。五年たてば状況は変わつてくる」といわれました。私の子どもは今年五度目の受験をしましたが、どのように状況が変わつたでしょうか。まだに入れてはおりません。

そして全日制高校は定員割れでも、やはり昨年もまだ落とされているという状況が続いております。五年前に「五年たつたら何とかなる」というお話を私はずっと耳の中で覚えているんですが、その後の取り組みについてお聞かせいただきたい。

それから黒沢先生のお話を先ほどから聞いておりましたが、黒沢先生の中には、高校進学者という中に障害を持つた子どもたちのことが入っていらないんではないか。ボランティアで、何ですか、先ほどちらつとおっしゃったのは、弱者へのボランティア活動、企業実習というお話をなさつたけれども、弱者はボランティアで接することなど何も望んでいません。当たり前に生きるというところで、やはり高校も、大学ももちろんですが、当然受け入れてくれる高校に行くべきだと思っています。

黒沢先生にはいっぱいお話ししたいことがあります、とりあえずそれだけです。

○広瀬 わかりました。五年後に入れるという確約は高教組の委員長との間の確約ですか。

○――（保護者） 確約というか、五年前に、この子を高校に入れたいと言ったときに。

○広瀬 話した相手というのは高教組の執行委員長ですね。

○――（保護者） はい。委員長が言つたんです。

○広瀬 きょうは執行委員長の方はいらっしゃつてないようですので、――竹田さん、申しわけないですけれども、高教組関係ということで、もしも答えられればお願ひします。

○竹田 一般論を言い出すと、ちょっと長くなつちやうんですけど、ことし三月の中学卒業生、約十万人ですね。その中で1%の子どもが中学校の障害児学級及び養護学校（盲・ろう・養護）の中学校ですね。ですから、約千人ぐらいですね。ということは1%、1%の子どもたちが中学の障害児学級、いわゆる七十五条学級と、養護学校等中学部卒業、こういう数字になつてているんですが、ことし例えば藤沢養護の小学校一年生の入学は〇というふうに聞いているんですね。全県平均すると、養護学校等の在籍率が神奈川は〇・六幾つですね。ということは、だんだん養護学校等の在学者数が減つてきていると、こういう数字ですね。そうすると、それは恐らく小・中の段階では普通級へ入つてきている。こういう流れですから、これから先のことを考えれば、小学校、中学校では障害を持つて

いる子どもたちが当たり前に普通級に入つていく姿というのが事実としてはだんだん出てくる。

そこで、その次の段階としては、当然養護学校等の高等部という道ももちろんありますけれども、一緒に学んできたんだから一緒に高校へと、そして地域の高校へと、こういう動きになつてくるというのが流れだうと思いますね。

うちの執行委員長が何と言つたかは私はわかりません。それは私が責任を持つて答えられないわけですので、高教組としてどう取り組んでいるかというと、きょう、私は肩書は藤沢高校教諭になつてゐるんですが、それは教育研究所の配慮で、藤沢高校教諭という立場と、高等学校教職員組合の立場とあります。が、今言つたそういう流れというんですかね、そういう事実を踏まえながら、私たち教組としては希望者全入という視点を運動の方向性として持つていて、当面定員内不合格というのをまず出さないという考え方、そこには障害者を含むのか否か、ということになりますが、執行部、私たちの考え方には障害者を含んで、そういう考え方を出しています。

現実的に、今、神奈川においては全日制普通科等々を中心いて、定員内で合格できるという姿はまだ生み出し得ていない。だから、五年間たつて実態としてどこが変わつたかと言えば、定時制への進学ということは確かにふえてきたけれども、全日制を希望しているという、そこから希望が始まるわけですから、そういう姿から言えば不十分ということです。ことしの結果については三日と、こういうふうになります。

○――（保護者） 今回の面で、結果については。

○竹田 私は答えられませんね。選抜をしていませんから。

○広瀬 よろしいですか。何かあれば。

○――（保護者） 例えば、何回受けたら、優先的にとるとか、そういうことはどうですか。本人の

希望と意欲という点では何度も挑戦するというのは、本人にとつては大変な希望と意欲だと思うんですけれども、その辺についてはどうですか。

○広瀬 きょうは竹田さんは高教組の代表という形ではなくて、一高校の教師という形で出ていただいているわけで、答えづらい面もあると思います。

○浅井さんの方で、三浦の地区でもかなりこういった障害児の高校進学問題について積極的に取り組んでいるという情報があるわけですが、その点に關して浅井さんの方から何かありませんか。

○浅井 先ほどの中でもちょっと触れましたけれども、三浦半島の教職員組合としても取り組み出したと言えるほどのものではないんですけども、ほんと、ここ三年なんですね。

それもやっぱり保護者、子どもの希望というものをどうやって生かしていくのかというところから始まつたわけで、私たち自身が主体的に「さあ、こうやって取り組んでいこう」ということできたわけじやなくて、むしろ保護者、子どもの希望をどうやって受けとめるかというところから、それこそ模索していったわけです。

少なくとも今組織的には、まず三年生の一学期段階から、親や子どもの希望をまず優先しようと。担任教師の方から、「養護学校へ行つたらどうですか」とか、そういう形じやなくて、どういう希望を持っているのか。その希望を全部集約をして、私どもの方の組織で障害児教育部というところがあるわけですが、そこの障害児教育部で集約をして、そこで当該の中学校、それから受験を希望する当該高校と話をしながら、これは教育委員会も含めてですけれども、市立高校を希望する場合は横須賀市の教育委員会になりますけれども、教育委員会も含めてどうやって条件整備をし、逆に言えば、合格した場合の中での体制をどうつくつしていくかというところを進めてきたわけです。

ただ、これも定員内不合格をまず出さないようにしようというぐらいの取り組みでしかないわけで

すね。ですから、個々の高校の現場の先生の職員会議、さまざまなもので、私どもとして定員内不合格を出すとか、教育委員会の方からもかなり定員内不合格を出さないようにという指導はさせていますけれども、現場の先生の方の主体的判断になつてているという現状です。

ただ、ここ三年間の中で定員内不合格は市立高校で言えば、かつてはかなりあつたわけですが、なくしてきている。ただ、今年度も、来年度もさあどうなるかということについては、一年、一年、そのとき、そのときという中で、まだ組合員全員で、教職員全員で積極的に意思統一なり、そういう合意が形成されているわけではないというのが率直なところだと思います。

○広瀬 それからもう一点質問がありました。黒沢さんに対して、いわゆる高校進学者、大学進学者の中に障害者の考えが入っていないんではないか。あるいは弱者はボランティアへという考え方、これはおかしいのではないか。障害者、あるいは弱者も当



たり前に生きたいんだというようなご質問がありました。これについてお願ひします。

○黒沢 中学区規模の総合選抜制というのは差し当たっての手段で、私は全員入学させるのが一番いいと思います。入学試験というのはいろいろいじくつたって、一長一短でして、希望する人はまず入れちゃつたらどうだろかと思います。それからいろんなことを考えればいいじやないですか。もちろん障害者も含めて希望する人は全員入れるということです。

ただ、今全国的状況を見ますと、なかなかそういう状況になつていらないわけですね。むしろ大学区の方に移行しつつあるような現状です。まず差し当たって、中学区規模の総合選抜制によつて比較的格差がなくなるのですからこれを一つの共闘の方途として、運動を進めていつたらどうだろかということなんです。

それから、私の大学でII部の夜間の方に障害者的人が一人入つて私の授業に出ていたことがあります。私は社会教育の担当で、ちょっとどういうふうにやつていいのかわからなくて戸惑つたことがあります。その学生は手は不自由なんですけれども、足で答案を書いていました。それから今は少しつつ設備もできたんですけども、当時は、随分前のことですで殆どないんです。校門まではお母さんが車で連れてきてくれるんですが、あとは職員みんなで背負つて教室へ連れてくる。そういうなかで私はいろんなことを学ばせていただきました。障害者が一人が入つてくることによつて、色々なことを反省させられました。自分の話がいかに抽象的なのか、声が小さいかということも含めて。

一番私が困ったのは、社会教育には実習というのがあるんですよ。「青年の家」なんかに行つて研修合宿するんですけども、そういうときによつしらいいんだろうかというので、困つたなと思ったのです。本人は「ぜひ行きたい」というので、いろいろ学生に聞いたら、結構ボランティアで障害者と一緒にやつっている学生がいて、「そんなの先生、心配することないですよ」ということで、そして一

緒に行きました。男の人だつたんすけれども、一緒に風呂も入つて、背中を流し合つたりして、そして私の方がかえつていろんなことを心配しすぎていたことがわかりました。結果的には杞憂に終つたのです。そういうことがあるんで、私もちよつと自己批判しなきやいけないんすけれども、もつとこく普通に小さいときから、そういう人々と接するチャンスがあれば、私のように余計な心配をしなくてもいいんだと、そのとき考えた次第です。

もう一つは、私の持論ですが、学校というのはなるべく軽くした方がいいということを繰り返し言つてゐるんです。今まで余計なものもいろいろ学校内に囲い込み過ぎてゐる。それで近代学校はかなり効率を上げたわけですけれども、今やそれが行き詰まつてゐる状況ではないだらうかと考えています。

だから、できるだけ原点に返したらどうだらうかということです。これは一撃にできませんから、まず差し当たつて四十単位なら四十単位の選択科目を、社会の場に返していくにはどうしたらよいだらうかということですね。社会の実務とか、体験との連携が考えられます。これは産学共同とか、いろいろ批判もあると思います。基本的にはそういうものと単位の代替によつて、そのほか家庭の育児とか、そういうことも含めて、やつたらどうだらうか考えますがどうでしようか。

それから私の大学の学生の中にいるんですけども、お年寄りの介護で非常に苦しんでいたけれども、だんだんそういう回を重ねるにつれて、いろんなことが、今までわからぬことがわかつてきて、「共生」という意味が、言葉だけではなくてわかつてきたというレポートの報告がありました。学校を軽くした分をそういうものと代替していくことが考えられます。さらに単位に組み込んでいくことによつて、いろんな社会の実態がわかつてくるんじやないだらうかという意味で申し上げたわけです。とりあえずそんなことです。

○広瀬 障害者の進学問題というのは非常に大きな問題だと思います。

障害者だけではなくて、いわゆる不登校の子どもたち、それから外国人労働者の子どもたちの高校進学をどう保障していくか。この問題は「高校とは何か」という根本的な問い合わせにもつながつてくる、非常に大きな課題になると思います。

ほかに何かあれば手を挙げていただきたいと思います。お願いします。

○小野寺（保土ヶ谷高教諭） 保土ヶ谷高校の教員をやつております小野寺と申しますが、一応分会員でもありますので、竹田書記長に対して非常に失礼なことを言うかもしれないんですが、まずあさつてうちの学校では卒業式があるんですが、「日の丸」が揚がるか揚がらないかということで、非常に分会の組織が崩壊するかどうかという瀬戸際のところにあります。これをまず知つておいてください。

それからもう一点は、先ほどから竹田書記長の話から、格差をなくすためには現場で教職員が定員内では必ず生徒をとれといいますが、そういうことをやつていると、全く逆に学校間格差を残したまま定員内で受けた者は全員とつていけということを言えば、必ず教員の方に差別感情というのが生まれてくるんですよ。つまり、生徒指導的に大変になつてきたということを、各教員がかなり盛んに言います。

どうして大変になつたかということを、ちょっと私、竹田先生のように口がうまくないんでうまく話せませんが、格差を残したまま、甘んじて非常に生活指導的に難しい生徒を受け入れろということをやる限りは、絶対差別感情というのが教員の中に生まれてくるんですよ。組合の方で、分会の方で、そういうのを定員内で何とか不合格にはするなということを言うと、組合は苦労ばかり強いるような組合で、こんな組合はやつていられないということになる、最近総合科をやれとか文部省から来ていますが、日教組というのは教育の自立性を守つてきたわけですね。守ってきたんですが、そういう

うことから分会そのものに離反していく教員集団が、県教委から言つてくるコース制や、あるいは総合科なんていうことを導入することも来ると思うんですよ。分会のわからないところで既にそういう動きがあります。

あさつての「日の丸」の件でも、かなり組織が崩壊しそうな状況にあります。そういう中で竹田書記長の定員内不合格者を出さないというようなだけでは、格差そのものをなくすことはできない。現場だけが我慢を強いられて、そのままいれば格差をなくすことができるということを言つてはいる限りは、組織崩壊ということが今後どんどん日教組レベルで起こるのではないか。

ここはそういう場所でないからそういうことを言つてもしようがないと思うんですが、そういうことで黒沢先生や、浅井先生が言われているように、ほかの各市民レベルや、ほかの学者、大学の先生や、あるいはさまざまな運動と連帶してやっていくという考えはどう考えられているのか、ちょっと質問したいんですが。

○広瀬 一応ここは分会とか、組合の大会の場ではないんですけども。組合がこれから消滅してしまうという問題はひとまず置きまして、いわゆる定員内不合格はやめるべきだとなると、いわゆる学力が余り高くない子どもも入ってくる可能性がある。そうすると、高校生の先生にしてみれば、勉強だけではなくて、いろんな生活指導の面でも負担がふえる。そこが一つ問題ではないかということですね。

それからもう一点は、定員内合格をやめることと格差の解消がどういうふうにつながつてくるのかと、いう質問だったと思います。それでは竹田さんの方でいいですか。では、お願ひします。

○竹田 この問題は本当は私が答えるより、高教組以外の人からの意見を聞いた方がいいんですね。

高教組の中では、これは毎回やり合う議論ですから、それをここで皆さんに聞いてもらつてもしようがないんで、この問題をどう、今現場の先生がそう言つて、私ら執行部の提起もこうあつたというのを、ほかの組織の人なり、ほかの市民の人たちがそれをどう受けとめるかというのを、私としてはちょっと逆に聞きたいですね。

一応私に対する質問がありましたから答えますけれども、私が言ったのは、格差解消のきっかけをどうつくつしていくかと。そうすると、学校間格差をなくせと。中学区総合選抜制にせよというのは、これははつきり言つて時間がかかるんですよ。そうすると、そこへ到達する第一歩として我々ができるは何なのかと。

制度を変えるというのは、これは行政なり、その他のもろもろの力を動かすということが必要ですから、我々自身ができる第一歩は何なのかと言えば、それは定員内不合格を出さないと。特に今保土ヶ谷が課題集中校であるかどうかは別にしておいて、特に川崎、横浜北部等、いわゆる進学校と言われているところが、東京の私学に子どもたちが行くということで、定員割れするというのが過去あつたわけです。

そういうところでも定員内不合格を出しているわけですね。それは成績順に並べてみて、離れちゃつた子ですね。偏差値で言えばマイナスが出てきちゃう偏差値なんていうのが考えられないけれどもあるわけですね。そういう子を落としていくわけでしょう。そういう子が入つていけば、この学校はこういうランクというところに風穴をあけることができるじやないか。そしてスライスされた、学力で言つうならば、これは成績ですけれども、入試学力でスライスされた形で言つうならば、まさつた状態というのを、我々自身がつくれるじやないか。そういう中から学校間格差というものの幻想を打ち破つていく我々の実践としてできるじやないかというのが、うちの提起ね。

これを私たち自身は組合の運動でやろうと。運動でね、できるんだから。それを制度として求めていくかどうかというのは、いろんなまた団体の人たちとやつていくというのがありますよ。例えば東京だとか、それから総合選抜制をやつているところなんていうのは、定員内不合格なんていうのはあり得ないわけね。もうこれはそこの定員を全部埋めちやうんだから。定員というのは何なのかということと、適格者じやないんですよ。これは大会のやりとりになつちやうかな。

定員というのは、行政がこれだけの子どもたちの教育を保障しますと、財政的にもね。保障しますと言つて、県民に宣言した数なんですよ。そしたら公教育の場合には、それは最低守ろうじやないかというのは、これは当たり前の姿としていけるのではないか。その上で我々にさらに苦労をかけるのかと。苦労をかけて、そんな組合の方針ならやめちやうと。それは組合の弱さだから、私らとしてはそこは克服していく努力を当然しなきやならないし、「日の丸」「君が代」で組合が組織問題になつちやうというのは、これはちょっと鬱い方がどうかなというふうに私自身思いますから、それはまた別途の問題として、定員内不合格についてはそう思う。ぜひそこはほかの人たちの意見をちょっとと聞かせてもらいたいというふうに思います。

○広瀬 学校間格差や序列をなくすには、やはり学区の問題、つまり総合選抜方式というやり方をとらなければいけないのですが、これはなかなかすぐに実現できないわけですね。そのワンステップというか、中間段階の方法として定員内不合格を出さないという運動から始めようということだと思います。

○竹田 子どもたちがどこでどういうふうに教師に負担をかけるかというのは、これは我々の方で選ばはどうですか。

○竹田 子どもたちがどこでどういうふうに教師に負担をかけるかというのは、これは我々の方で選

べないんですよ。教職員といいうものはね。それだつて我々の仕事として存在しているわけだから、だから、そこにある子どもたちを、我々はそれはあるときにはドロップアウトさせなければならないという事態も、これも全面的に否定はできないけれども、しかし、それは最大限抱え込んでいかなければ、これは公教育である以上しようがないですよ。これはしようがないというふうに私は思いますよ。手のかかるというかかり方といいうのは、これは何もいわゆる課題集中校だけではないんですね、決してね。私らとしてはそこのところについては、確かにそういう事務的な量も含めて、教育的なさまざまな課題を含めて、手間暇かかっていくわけだから、そういう点で言うならば、そこは人の数をふや、そうとか、そういう運動をしてきているわけ。じゃといいうんで、簡単に切つちやうかとという答えにはならないだろうというふうに思います。

○広瀬 教員の負担の問題について、フロアの方から何か、特に高校の先生の方から賛成意見なり、あるいは反対意見があれば出していただきたいと思います。あるいは定員内不合格をやめようという運動について何かほかの立場からの意見みたいなのがあれば。

○――（三崎高教諭） 三崎高校なんですけれども、今の定員不合格については出さない方向で当然やるべきだというふうに私は思っています。ことしというか、昨年転勤したので、私もそつまだ状況がわからないんですが、理念的には正しいというふうに思いますね。

ただ、そういう中で、現実はそういうところの学校の先生が疲れてしまつていていうのが事実ですね。つまり、何とかしようと。そういう子を抱えながら、先ほど「抱える」という話がありました。抱えながら何とか高校教育を変えていこう。小学区なり、中学区に向けて頑張ろうというふうに私なんかは思っていますけれども、現実は生徒を見ると、非常に疲れるというよりも、はつきり言つたら、自分が死んでしまうというか、授業中ポケベルが突然鳴るとか、それから机の上にお菓子が置いてあ

るとか、ニュースが置いてあるとか、ちょっと注意すると、こちらが怒られる。「うるせえ」ということを言われるわけですね。

すべての子がそういうことじゃないですが、もちろんいい子もいっぱいいますけれども、現実にはそういう子の中には、私が教えたこと三二年生の子はそういう子がありましたね。そうすると、現場の教師がめげちゃうんですよね。それでもつて私たち小集団ということで、一クラスを一クラスに分けたり、三クラスに分けてやろうというふうに思って、それでもつて元気になつていこうというふうに私たちを要求しているんですけれども、現実は行政は、きのう施設課と私は交渉したんですけども、現場に来て、教室を二つに分けて二十人ぐらいで授業ができる教室をという話をしたんですけれども、これはできませんと。10%シーリングがあつて予算がないと。講師時間についても何とか持ち時間数を減らしてやろうと思っても「そういうのはダメです」ということで、はつきり言つたら、きょういろいろ話がされて、非常にいい話だと私は思うんですけれども、現実は人もつけず、金もつけず、そしてこういうことをやろうと言つたって、現場の教員は信用しないですよ。自分だけ苦労しなくてはいけないんですからね。

だから、私は思うんですけども、そこはかなり教育運動というか、もちろん先ほど言われた組合運動も大事だと思う。ただ、そういう教育運動としてもう少し人もつけ、金もつけ、三十五人学級なり、そういうものを含めて何とかつけてもらわないと、現場の教師というのは早く出ようとか、結局そういう状況になつてしまふので、私は思うんですが、きょうの提言、全くいいと思うんですが、しかし、そういう運動も私たちやっていかないと、理念だけではもう現実は変わらないなどいうふうに思つています。

以上です。

○広瀬 理念としてはわかるけれども、現場の先生は大変苦労して、もう消耗してしまっているということだと思います。多様な子どもたちが入ってきますと、先生の方も教えづらいという面があると思います。

そういう現場の教師の困難さというのはどこの中でも多分起きていると思います。それについて保護者というか、親の立場から覚さん、何か一言あれば、お願いします。

○覚 先ほどの先生がおっしゃっていた、そういう子どもが入ってくると教師は疲れるというふうなことを聞きましたときに、非常にひつかかりました。中学校の先生はそういうことをいつもやっていますのに、高校の先生はそういうことをやらないのか。やればいいじゃない、というのが私の思いです。それは教育の原則だと思いますが。

それともう一つは、三崎の先生がおっしゃっていましたが、親たちを引っ張り出すということが一つの方法じゃないかと思うんですね。先生と生徒だけの闘いというものを先生は親に言いたがらないですよね、いい格好して。でもね、先生と生徒の闘いを親にぶつちやけて言ってほしい。親は一〇〇%の親が必ずしも出られるとは思いませんが、力をかしたいけれども、先生が全然胸襟を開いてくれないから、どこからとつかかっていつたらいいかわからないという親たちが喜んで参加すれば、子どもというのは変わっていくんじゃないかなと思うんですけれども、それも一つの試しだと思います。

○黒沢 教師以外に教える人はいないでしようか。

私の授業ですが、社会教育という特殊性があるのかもしれませんけれども、識字教育なんて私より知っている人が沢山いるわけです。例えば横浜で大沢さんというすごい人がいます。そういう人を呼んできたり、公民館の職員を呼んできたり、私なんかよりずっとおもしろい話をしてくれるし、安い

謝金で恐縮しているんですが喜んでやつてくれるんですよね。そういう人ばかりに頼つてはいけませんし、そういうことをやると、臨教審路線に乗つちやうとというふうに言われちゃうかもしませんけれども、やっぱり地域社会に、高齢化社会になつていていますから、いろんな技術やノウハウを持つている人がいるわけですよ。そういう人々の協力を求めたらいかがでしようか。

高等学校の先生は、どうも自分たちだけでやるというふうに頑張つちやうですね。もちろん条件闘争をやつしていくことに私は大賛成ですし、それはやらなきやいけないんですけれども、それと併行に学校外の人々の協力の可能性はありませんですかね。

ですから、私は、結構“手配師”みたいなところがあるんですよ。いろんな地域社会に行つていろんな人を見つけてきて、そういう人々に話してもらって、私も勉強になりますし、生徒も喜んでいますよ。私の話なんかを聞いて眠つている学生も、そういう人々が来て話してくれれば、非常に迫力があるわけですからね。しかし、こつちも給料をもらつているわけですから、ちょっとコメントめいたことをやらなきやいけないのでやりますけれども、とにかく非常に勉強になるんですね。

そういう可能性はないですか。学校を軽くしろというのにはそういう意味なんですよ。

できれば単位の認定までも現場に任せたらどうでしようか。それであとそれを形式的に承認していいたらどうですか。学生も、生徒も喜ぶし、そういう可能性はないでしようかね。私、課題集中校の先生にちょっと聞いたら、「いや、生徒は学校では非常にやる気がないけれども、そういうところに出ていけば非常にはりきつてやる生徒がかなりいますよ」ということでした。そういうことをやつたらどうですか。あと必要なところだけは学校でやればいいんじゃないですかね。そういう可能性はないですか。

○広瀬 質問なさつた方どうですか、そういう可能性について何か簡単でいいですから、話してみて

下さい。

○――（三崎高教論） そういう努力はしているんですけども、我々、教育課程の中でも来年度から、例えば三浦半島再発見という講座をつくつて、例えばそういう中で地域に出ていこうというふうなことで、十人ぐらいの生徒を二人の教師が教えるとか、例えば水産業とか、現場の問題とか、いろんな人に聞いていこうということをやっています。

だけど、そういうふうな前にやっぱり疲れてしまうというのが現実にあるんです。だから、それは全くやつていらないということではなくて、具体的には取り組んでやっています。

○広瀬 篠さんと黒沢さんの意見は、教師が一人で全部負つてしまふのではなくて、親とか、あるいは地域の人たちにも参加してもらつたらどうかということですね。篠さんが「やりなさい」と力強くおっしゃっていましたけれども。

これまで定員内不合格の問題、あるいは格差の問題について話してきました。別の何かテーマでもつてご意見ありましたらお願ひします。

○――（保護者） 高校生と二十歳になる子どもを持つておる親でございます。そのほかに神奈川県教育を守る会という会がございまして、三十九年の歴史のある中の一員でもあるんですけども、今、お話をいろいろ伺つていて、フツと「教育つて何のためなの」ということが私のメモに書いてあります。職業につくためでしょうか。そうではないんじやないか。

今、生涯教育ということであつちこつち、この前宇都宮大学の、お名前を忘れました、何とかという助教授も話していましたけれども、十五歳、十八歳、高校生、大学生になるという考えを捨てるこれから今の世の中は始まつた方がいいんじゃないか。先生方も十五歳の高校生をそろえようと思うから、しんどいと思う。の中に十八歳の高校一年生がいたら、しんどさというのは当たり前になるん

じゃないか。だからといって高校の先生方にしんどさを私は強要しているわけじゃないません。

ただ、教育ってやっぱり生きるために、命がある限り生きる。そのための一つの手段としてまた夢があつて、幅があるものとして職業や生き方があるんだと私は思っています。私は病人として生まれて、病人として生きてきましたので、治療しなくてはいけない困難さを抱えながら生きていますから、もうちょっと幅を広げていただきたい。

それと、まず現状を受け入れて、つまり、高校入試ということ、あるんですね。それを受けながら私は二人の娘を育ててきました。二人とも受験期で悲しいとか、つらいとか思つたことはありません。つらい思いをするのは娘たちでいいんです。親はつらくなくたつていい。もちろんそれまで段階を踏んできました。突き放すためには。そういうことを今少し先生方も、世の中も子どもたちに親切な路線をしき過ぎているような気がしてなりません。泣くのも生きるバネじゃないかと思つておりますので。

そこでちょっとご質問なんですけれども、私はここ三年間で二十歳になります長女の友だちを三つのパターンで亡くしました。部活中の事故、非常にいまだに、きょうはその学災連の総会でしたけれども、こちらの方で何か将来的な模索が自分の中で見出せるのではないかと思つて、そちらをけつてこちらに参加しましたので、どうしても欲しいものがありまして、ご質問させていただきたいんですけれども、子どもたちが高校中退するのは自分の選んだ進路じゃないから。じゃ、選ぶような進路を努力させたかということを、中学校の先生方、それと同時に親が反省すべきことじやないかと私は思います。

中退した連中をたくさん知っていますし、きいています。でも、そんなに悲しんでいません。ただ、生徒として中退した人がもう一回入れる制度をもう少しここで考えていただきたいなどいうふうには



思います。

それともう一つは、先ほどの高校のクラスの人数なんですけれども、四十人を見ようとするから大変なんであつて、今、高校生も含めてクラスの人数を減らすという運動をもつと具体的にしていただけないでしようか。三十人、そういうことをあれすると、もうちょっと、もちろん格差を減らさなくてはいけませんけれども、そういうことの具体的な運動は竹田先生の方に伺いたいんですけれども、どうなつているんでしょうか。

定員内不合格者を出さない。私、これは大賛成です。当面のやれることとしてやれると思います。このためには多分八十単位で卒業させると、先生方の職業がちょっと危なくなるんじやないかという危惧もある。それが何といつても高校、今受験がある以上は、私は教育を守る会として、横須賀支部は非常に、また三教組もとても協力をしてくださいますので、一緒になつて高校はどこに入るかじやなくて、何を学ぶかだということを親がもうちょっと納得しよう。現実には受験があるのでからということで、

ここ十年学習会をやつてまいりまして、大分根づいてまいりました。そういうことは親たちはしています。

それから寃さんがおっしゃつてくださつた、高校の先生方、もうちょっと問題を親に投げかけてくれ。私は高校で三年間やつてまいりました。見事に先生方は乗つてくれました。もう一年間で集大成としてやれると思つたら、実は県立初声高校の死亡事故でございまして、そちらの方にかかりつきりで、先生方とはその直接、先生方のしんどさを吸い取つて差し上げることはできませんでしたけれども、しかし、寃さん、高校の教師はというか、学校は閉鎖的です。とても大変です。でも、できます。ですから、先生方も、もうちょっと問題を親に投げかけてくださいじやなくて、親が食い込んでいくべきだと思うし、ただし、先生方を責めてはいけないと思います。大変です。本当にね、困難校は大変だと思います。そうじやない学校も大変でございましょうが、私は、先生方も、親ももう少し輝いて、子どもに不自由をさせたいと思っております。

ですから、今のところ、あとは浅井先生にお伺いしたいんですけども、中・高が反目しあつてもしようがない。もつと話し合うべきだ。具体的に県立高校の教師とのどのような話し合いを持つていらっしゃるのか。伺いたいと思います。

長くなつてすみません。

○広瀬 いろいろな問題がたくさん出ました。一つは、今の教育のあり方、高校のあり方をもう少し柔軟にしたらよいのではないか。中退した子どもにも再度機会を与えてあげたらどうか。この子どもの中退問題についてどう思うかというような質問でした。

それからもう一つは、クラス人数を減らす運動、これはどうなつているかということですね。あとは中学校の教師と高校の教師との間のコミュニケーションですか、話し合いみたいなものはど

うなつて いるか。

シンポジストで 答えられる方、 浅井さんどうですか。

○ 浅井 今、 私への質問もありましたので、 それも含めてちょっとお話をしたいと思うんですが、 先ほどの定員内不合格の問題と いうことで言え ば、 私の方で問題を提起させていた中でかかわつてくるんですが、 制度改革をどうしていくかというの は、 これは組織として強力に運動を進めいく課題だと考 えています。 それが一方だ と いうふうに思 うんです。

ですから、 制度改革を待つてから何かじやなく、 それを促していくも う一方は、 自分たち自身がやつぱり厳しい中でやつていかなければいけない課題だ うと いうふうに思 うわけです。 それが例え ば今高校では組織挙げて定員内不合格を出さないよ うにしよう と。 これは高校だからできる課題だと思 います。

逆に義務制の方で言え ば、 どうやつて地域の高校に子どもたちを送つていくか。 遠くに行かさないで、 地元の高校を地元の中学でつくつしていくか。 これが義務制の課題だ と いうふうに思 います。 これはどつちも、 私どもの方でもこれについて大変論議もありますし、 そんなにうまくい つて いるわけじやありません。 でもそれを義務制は義務制で、 高校は高校でお互いが自分でやれるところは何かとい うことをやつしていくことが、 少しづつでも変わつていくんじやないかなと いうふうに思 います。

一つは、 そこの中でどうしても必要なのは中・高の連携だ と いうふうに言いまして、 今も質問があつたんですが、 具体的には組織としては教職員組合同士で研究会を定期的に三浦半島では持つて います。 これは高校の先生方の組織と、 私ども義務制の方の教師の組織と、 これは組織同士で定期的に持つて きています。 これは十数年続 いて いる組織です。

それから学校同士ということで言えば、中学校というのは、子どもたち、生徒たちにどういう高校かということを紹介するために高校に対する説明会つてよくやるんですね。そこがここ二年間の中でも地元の高校の先生を呼んでください。遠い学校の先生を呼んで紹介してもらつても、それでは何にもならないから、自分たちの地域の高校、三校指定がせつかくあるですから、その地域の高校三校の先生に来ていただいて、子どもたちで学年集会なり、話をしてもらつて、高校の説明をしてくださいと。

それから逆に、これはまた高校の先生の方にお願いになるんですが、積極的に地域の中学校に行つていただき、それは今部活動という形での交流というのが行われてきているんですが、そういう形だけじやなくて、さまざまな課題で、例えば教職員同士で飲み会をやつてもいいというふうに、私はそういうところで始まるんだろうと思っているんですが、そういうところから始めようじやないかという形で、少しづつではあっても、地域の中学と、地域の高校でお互いの一つのネットをつくっていくということが大事になつていくんではないかなと。また、その一步が今始められているところだと思います。

ただ、これを全県的にどう広げ、地域の高校へ進学しようという運動も、全県的な形ではまだまだなり得てないという現状がありますから、全県的にどう広めて、神奈川の教育をどう考えていくのかということがまだまだ大きな課題として残つているんじゃないかなというふうに思います。

○広瀬 よろしいですか。

それでは、ほかに何かご質問なり、ご意見があれば手を挙げていただきたいと思います。

○――（教諭）質問になるか、意見になるか、ちょっとわからないですけれども、先ほどから四人のシンポジストの方の話を聞いていて、いろんなところでいろんなふうに言いたいなと思うんですけど

れども、それこそ口がうまくないので、どのように絡ませていいのか、ちょっとわからないんですけれども、私、きょうここに来た理由というのは、私、教員なんですけれども、ピラを見て、「高校教育の現在と未来を問う」という題で、神奈川の入試制度をめぐってなんていう題で、今一番興味のあるところなんで来たんです。その教育の未来ということについて、フッと今話を聞きながら思つたんですけども、今私は鎌倉市の教員ですけれども、藤沢市の住民でもあるわけです。

今、藤沢市で老人問題が非常に進んでいる市だそうなんです。新しく老人ホームが今度できるという、その前の設計図を見た人の話を聞いたんですけども、この老人ホームは痴呆症の老人も収容できるように、例えば徘徊老人なんかもそこで徘徊をしながら生活できる。そういう設計がしてあるそ

うなんですね。

その徘徊ができるようにというのは、うろうろするので、うろうろできるように行きどまりにならないように円い道がホームの中にできていて、そこに老人を、徘徊老人を収容する。そういう案が出ていたそなんです。

私、その話を聞いて、この話について見方とか、考え方とか、感じ方というのはすごくいっぱいあると思うんですけども、教育の未来というのが、そういう形に集約されていくのかな。いろんな立場の人が、いろんなところで、神奈川は特にそうですけれども、労働組合とか、それから黒沢先生みたいな学識経験者とか、それから一般の父母の声とかというのを行政がいろいろ取り込んで、いろんなものを進めていますよね。

そういう中で私が見えてくる教育の未来というのが、どうも徘徊してもよい老人ホームというのかな、そういうところにフッと重なりあつちやうよな気がしたんですね。それが一つ。そういう気がしたんです。

それからもう一つは、ずっと臨教審以来、中曾根さんというのは私はすごく頭がいいと思うんですけども、今、つまり、私たちがこういう場で教育改革とか、教育について語らなければならぬような場をつくつてしまつた。總ぐるみでみんな教育について、みんながああだのこうだのと言つてしまつ世の中をつくつたことが、つまり、臨教審のねらいだつたんじやないかなというふうに、フツとそういうふうに二点目に思つてしまひます。

それは教育改革の話をしていると、だれもが何か制度を変えられるような幻想を持つてしまふんじやないか。

今、四人の方も制度の話が多かつたんですけども、父母の運動にしろ、何にしろ、何か制度を変えてよい制度ができるいるんじやないかという幻想に陥つてしまふんじやないかな。私も含めてそんなんですけれども。そういうときに現実に今のこういう現状の中で生きていて、そのありのままの姿を認めてもらえない存在。そういうのが弱者だとか、いろんな言い方をされちやうんですけれども、そういう人がそういう話では不都合があるということで異議申し立てをしているのが、一つは、先ほどから発言があつたんですけども、いわゆる障害と言われている子の高校入学なんですね。

だから、そこでいろいろ制度改革の問題とか、高校現場の教師の問題だとか、それはすごくわかるんですよ。だけど、わかつていたら、ただその場でみんなと一緒に生きていくことができない子が異議申し立てをしているというのが、その問題につながつて、だから、制度改革なんかのいろんな運動をやつしていくときに、制度改革をすればいいんじやないかと幻想を持つしていく運動のやり方というのに、私はちょっと疑問を持っています。

それから三番目に言いたいことは、もう一つは、じゃ、どうしたらいいのかというと、今私たちが生生活しているその場で、例えば高校の先生が、さつきすごく大変だとおつしやつたんですけども、

その先生は自分の生活というのもあつて、仕事でやつてある部分と、自分の生活があつて、そんなに仕事の部分で苦しまなくたつていいんじゃないのというような、そういう人がもう今複雑な世の中ですから、一人で何役もやつてゐるわけですから、そういうのをトータルひつくるめた自分の生き方みたいなところで出会つた問題を一つ一つ、一人一人がそれぞれの立場できちんと考へていく。そういう進め方をしないと、非常に無責任な発言が、私、黒沢先生に特に思つたんだけれども、非常にこちらで聞いていてイライラしてしまつというか、そんなこと言つてもらつたら困りますというような発言があるんですけれども、やっぱり私たちは今いろんな差別もしているし、差別もされているような立場にいるわけで、そういうところをきちんと見つめた上で運動を進めていかないと本当に怖いな。つまり、中曾根のもくろみに乗つかつてしまふんじやないかなと。

以上三点感じたりしたことをちょっとと言つてみました。

○広瀬 特に質問という形ではないのですが、制度改革をすれば、何でも解決してしまうというのは一つの幻想ではないか。そういう幻想は持つなということですね。

もう一つ、差別の問題について黒沢さんに対する違和感みたいなのを表明されました。今のことに関して黒沢さんの方で何かあれば。

○黒沢 そういうふうに受け取られたのかなという感じですけれども、私も制度を変えられればうまくいくというふうには必ずしも思つていらないんですね。

覚さんの話の中で大学を変えれば、という話が議論の中に出でこなかつたもんで、ちょっと私の感想を今の話とからめて言いますと、私も確かに大学をやっぱり変えなきや教育が変わつていかないだろうというふうに思つてゐます。大学間には格差が非常にあつて、これを変えない限りなかなか直らないだろうという思いはあるんですね。

以前社会党でシャード内閣なんていうのをつくるというので、一つの政策の草案をつくってくれといわれて、私は大学改革のことを担当したわけです。今それを全部紹介する時間はありませんけれどもほんの一部を申します。全国の国立大学を、国立総合大学にしてできるだけ格差をなくす。教員の方も東大の教授を十年やつたら鹿児島大学へ行つて十年やるとか、そういう異動をして格差をなくしていくことを強制的にやる。

そのかわり旧帝大の大学院は連合大学院にして、そしてブロックごとに研究施設をつくる。大まかに言うと、そういう案をつくつて、もしこういうふうにいけばなかなかおもしろいなと思つたんですね。しかし、それはつくつただけでどうやつたらできるかとなると、権力も何もないわけで、もし政権を取つたらという話になつちやうんで非常に虚しいんですね。

それをつくつた代議士に先日会つて、「どうしましたか」とたずねましたら、「ああ、そんなこともありましたな」という話になつちやつたんですね。これは政権と直接関わる臨教審や中教審の場合と違うところだなと無念に思つたわけです。

ですから、先ほど言つたように、差し当たつて、中規模の総合選抜制ができればいいなというふうに思いますけれども、それを展望しながら、しかしそれができるまでは何にもしないというわけにいきませんから、差し当たつて中・高一貫制へ向けて、地元集中受験というような形で運動をすすめる。この運動は大阪なんかでは歴史と実績があつて、これによつて中退者がかなり少なくなつています。そういう実績なんかをみんなで共有し合いながら運動を進めていくことが必要です。そういうときに高等学校の先生の適格者主義というのはかなり問題になつてゐるんじやないだらうかと思います。私としては、大学の方からトップダウン式に改革していくんじやなくて、中学の方から高校へ迫つていくような、そういう運動を起こすことによつて、さつき言つた制度の改革ができる前に一つの改革的

な要素はあるんじゃないだろうかと思います。

さつき竹田さんが言われた、定員内不合格者を出さないという、それも一つのステップだらうと思います。それから先ほど三崎の先生がおっしゃったような、いろんな条件が整うのを待つてているというか、それがなきやできないという前に、まずそういう可能性としてそういうものを運動として起こしていくことが必要ではないだらうかということを私は申し上げたいのです。制度を変えられると考え、それをもてあそんでいるというような気持ちは主観的にはないんですね。

それから臨教審で中曾根氏がそういうふうに言つたということは、我々が大いに議論して、できることをやつしていくという場をつくつてくれたと把えれば、それは一つの反面教師ですから、逆手にとつて大いにやつたらどうだらうかと私は思います。

○広瀬 大分時間が過ぎてしましました。

最後にどうしてもこれだけは言いたいという方があれば挙手をお願いします。では、前の方お願ひします。

○沢（保護者） 私、三浦に住んでいる沢と申します。教員でも何でもない建設現場に勤めている者なんですけれども、意見じやないんですけれども、感じたことだけお話しさせてください。

一つは、黒沢先生がレジュメの中で書いてあるノンエリートの自立、これは非常に大切で、私も興味深く聞かせてもらいました。

やはり批判的検討というんですかね、そういうものがない限り、確かに私もエリート集団というのは必要だと思うんですけれども、それだけじやなくて、ノンエリートの自立。要するに選択、どういうときに何を一番選択しなければならないかという批判的な面ですね。そういうものが私は一番大事なことじやないかなと思って、大変私自身参考になりました。

それからあと、これは私の考え方なんですけれども、先ほど来、いろんな方の、先生のご意見というか、聞いていますと、申しわけないんですけども、ちょっと枠にはまり過ぎられているんじやないのかなという気がするんです。先ほどどなたか女性の方が病院の生活のこともお話しされていますけれども、まさに病院の生活とか、そういうのが日常生活のレベルなんですね。

教育は別に高いところの次元云々というよりも、そういうふた日常生活の目のところをもう少し素直な目というんですかね、素直なそういうふたものというのは、私はちょっと申しわけないんですけども、何かを得たいなと思って、きょう来させていただいたんですけども、そういうのもちょっと残念だったかなというのがあつた。

といいますのは、今の教育というのは、数学にしても、英語にしても覚えるというのが確かに中心になつてゐるかもわかりませんけれども、優しいとか、思いやりがあるだとか、素直な子だとか、よく手伝いができるだとか、そういう評価の枠組という



んですかね、それが日本の社会というのはどうしても私はできていないような気がするんですね。ですから、もう少し評価の枠組の考え方というか、体系づけをすれば、授業中に飛行機を飛ばすとか、お菓子を云々という話、確かによくわかるんです。わかるんですけども、評価の体系を、何ですか、算数、英語とか、そういうものができる子がいい子だと、優秀な子なんだという、そういうた、これは親の立場も悪いんですけれども、社会全体がそういう目をもう少し、広い意味での評価体系の方法を日本全体がつくらない限りは、なかなか、今そこの看板に出ているような「現在と未来を問う」ということ、未来がなかなか私は出てこないんじゃないかなという気がしました。

以上です。

○広瀬 意見ということでよろしいですね。

あとほかに誰かいませんか。それでは後ろの方お願ひします。

○小野寺（保土ヶ谷高教諭） 先ほどから舌足らずで申しわけないんですが、今、状況というのは非常に恐ろしい状況に来ていると思うんですよ。ここで本当に何とかしないと、今の現状では定員内不合格者を出さないと、いうのは確かにわかります、それは。それは第一歩だと思うんですが、それをやっていると、もう組織は立ち行かないところに来ているような感じがします。余りこういうところで言つちやいけないと思うんですが。

本来、人権といものを守るには、ちょっとした労働権的なことを言つたり、一応私は人権同和を担当していますので、人権的な発言をすると、高校教員はもうそういう教員自体がちょっと組合的だからということで排除するような考え方が非常にふえてきています。現状としては蔓延しつつあります。学校教育の中で教員自体が自分たちがエリート化してきて、少しでもいい学校に次の人事でいこうということを思つてているんですよ。そういうようなことでうちの校長などはそれを使って、人事を使

つて脅す。それで「分会なんかで一生懸命やつているといいところに行けないよ」なんていうようなやり方をして脅かすというような状況が現状で起こっています。もう本当に非常に危ない状況にあります。そのところを人権とか、そういう視点を持つてやつていかないと、もう高校教育そのものが格差を生み出す選別装置になってしまってやつというようなすごい恐怖感があります。

もう実際今入選で動いているんですけれども、私は分会の方で役員ではないんですが、分会的な発想を持つてているんで、組合員的発想を持つてているんで、入選からつまはじきにされて、どういう入選が行われているのか全くわかりません。そういう状況にもう来ているんですよ。

こういう状況をそのまま放置しておけば、必ずわけのわからないところでいつの間にかコース制、コース制から総合科、そういうものがくれば、学校間格差、普通科、総合科、体験講習ですね。コース制とはどういうものか聞いたんですけど、県の方では、コース制というのは総合科にかわるものではないというような考え方で言つていましだけれども、恐らくニュアンスではコース制がどんどん導入される中で、そういう中から総合科というものが導入されて、学校間格差というのはずつと統くんじやないか。そういう中で教員はどんどん躊躇していくような発想、差別主義的発想というものを持つていいてしまうのではないかと思います。

○広瀬 わかりました。

○小野寺（保土ヶ谷高教諭） そこのところをもうちょっと、竹田書記長と言つて申しわけないんですけども、考えないと本当に。

○広瀬 分会というか組合が危ないということです。終わった後で竹田さんとともに一度詳しくお話ししてください。

それでは最後に一言、前の方で終わりにします。

○―― 一言ということで、「高校教育の現在と未来を問う」という題を改めて見まして、過去・現在、高校に入っていない子どもたちをどうしていくかということを考えない限り、未来はないんですね。

先生が大変だとか、何が大変だとか、いろいろあるけれども、現実に本当に生きている子どもたちをどうするのか。高校に行きたいけれども、過去・現在、全く入っていない子どもをどうするのかということを考えない限り未来はないと思います。

ま と め

○広瀬 大分長くなりました。もう少し時間がとれれば、いろんな方にもっと自分の思いみたいなものを話してもらうことができたんではないかと思います。

きょうのシンポジウムを通してわかったことは高校の現場では格差と序列というものが現実に存在して、それがさまざまな問題を生み出している。一挙にそれは解決できないけれども、できるところから、手のつけられるところからやつしていくことが重要であるということです。

ただし制度を改革すれば、何でも解決するというような幻想は抱かない方がいい。むしろ現実における差別の問題を普通のふだんの目で見ていく。そういう視線が必要ではないかということですね。それからあと教師の負担の問題、つまり労働負担の問題をどのように考えるかということもこれらの課題になつてくると思います。

きょうは長い間、いろいろと話し合いができました。有意義であつたかどうかはわかりませんけれども

ども、一応これで終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 もう少し時間をいただきたいと思います。

最初に自己紹介しなかつたんですけれども、研究所の事務局長の谷口といいます。

実はきのう、電話の問い合わせがありまして、この会にどうしても来たいんだけれども、どうも公務で行けそうもない。この内容というのは後日何か記録になつて出るんでしょうか、という話がありました。私どもでは第一回、不登校をめぐつたシンポジウムをやりまして、きちんとテープおこしをして冊子をつくております。第二回目ももうじきできます。うちの研究所は義務制ですから、小・中の先生にはいくんですけれども、今回のシンポジウムの記録はぜひ高校の方にも、それから問い合わせがあればどなたにでも送りたいと思いますので、そのようにお願ひしたいと思います。

それと最後に、感想記入用紙が皆さん手元にあると思いますが、ぜひこれに、きょう話したかつたけれども手が挙がらなかつたという方は感想を書いてほしいと思います。感想もブックレットの方と一緒に入つていきますので、よろしくお願ひします。

それからシンポジウムの第四回、第五回は何をやるのかまだわかりません。不登校に関する要求、要望が多いものですから、パート3をやるかもしれないし、きょうのこの高校の問題についてもきょうが始まりだと思っておりますので、また検討して二回目、三回目と行うことがあるかもしれませんので、ぜひその折にはご参加をお願いしたいと思います。

最後に、壇上にいるシンポジストの四名の方、それからコーディネーターの広瀬さんに再度の大きな拍手をお願いします。（拍手）ありがとうございました。では、小中副所長が閉会のあいさつを申し上げます。

閉会の言葉

○小中副所長 土曜日の午後、大変お忙しい中を本日この第三回の教育シンポジウムにて出席をいただきまして、本当にありがとうございました。

約百五十人の方にきょうはご参加をいただきました。おかげさまで多くの方々からさまざまなお意見、あるいはお考えをいただきました。こういったことを我々も受けとめながら、今後の運動、あるいは日常の教育実践の中に生かしてまいりたいと、こんなふうに思っております。

本日、コーディネーターを務めていただきました廣瀬さん、また、シンポジストを務めていただきました四人の方々、本当にありがとうございました。

以上をもちまして第三回の教育シンポジウムを閉会とさせていただきます。
どうも本当にありがとうございました。(拍手)

参 加 者 感 想 文

- 親と教師ががつちり手を組んでいいけるといいですね。いろいろ勉強になりました。
- 先生という職は人を相手の職業だということを充分考えてほしいなと思いました。大変な職業でしようが、ぜひがんばってほしいと思いました。また、地域の人々とのつながりをぜひつくるように思いました。何も先生だけで悩む必要はないです。
- ・“先生たちの負担”ということを改めて考えさせられて、格差について、高校には格差があつてもよいのではないかと思いました。もう個々の生徒の学力、時には思考力、意欲の差は明らかなのに、平等という名の不平等を強いるのは疑問でした。
- ・ 高校生の娘は、中学の時より話が合う人が多くて、喜んでいます。
- ・入試の性格が、振り落としを目的としていることからすれば、やはり入試選抜そのものを変える必要がある。ア・テストを残すと明言される中で、どう総合選抜制を注入していくかが期待される。・ 今日の議論がとても良かったので、又新しい年度に引き続いてやって欲しいと思います。
- ・ 障害児の部分では、高校の特学についてよく話しているが、いろいろな方面から聞えればありがたいし、進めてみたい。
- ・シンポジストが、もう少しいろいろな角度から考えて、体験して、その上で「自分の主張をしていただきたいと思った。(ごめんなさい)
- ・ 黒沢先生への批判は、発表の時間が短く少ないからだと思う。四人の中では一番体験経験をした上での現状の出来ることを出来ることからとの発表になつたと思う。素晴らしいのに…。黒沢先生の話をもつ

ともつと聞きたいと存じます。エリートとノンエリートの論理、頑張つて実践して下さい。私達も自立したい。高校の先生ごくろうさまですが、二十歳になつた子たちの栄養になつていて、ことを分かつてください。…と申し上げたい。

・このよつなシンポをたくさんやりましよう。（あえて、やつて下さいとは言わない。）

・ご一緒に、クラス人数減をやりましよう。

◇ 広瀬先生、名コーディネーターでした。ありがとうございました。（教育を守る会 稲森）

◇ ・「学習意欲や目的意識のない者は、高校へ行くべきではない。」との意見がアンケートの中にあつたが、その通りだと考える。だからこそ、高校進学を本当に希望している子には、希望する高校へ入れるようにして欲しい。（希望者全入制）

・親達も、外見だけで高校へ行けというのではなく、もつと子供の本当の考え方を受け入れ、考えていくべきである。（進路を決めるのは親でなく、教師でもなく、子供自身である）

・適格者主義は、子供達をゆがめているようしかたがない。子供達が、本当に何を求めているのかを、教師も良く知らなければならない。希望者全入制が子供達を甘やかすことはないと考える。これから中学生になる子を持つ親として、これから三年間をどのように過ごすか考えていかなければならぬ会となつた。

◇ 小学校の教師で、中二、小六の子の母親です。何がどうなつていて、かわからぬまま、いろいろな会合に出させていただいています。そして感じることは、小・中・高の教師があるがままの姿を出しあつて、本音で語り合うこと、親としての気持ち、教師としての気持ちを正直に言い合うことだと思います。お互いに、まず知り合い、わかりあって、はじめてみんなでどうしたらしいのか語れると思います。小の教師でありながら、中・高のこと少しもみていないような気がしました。

□・筧さんが言われた「教師と生徒とのたたかいを、親にぶちまければよい。」のことばに、示唆を与えた。

・会場は、県のまん中でできたら…。

□・非常に勉強になりました。大学改革が問われている時、現場の声を聞こうと思つてきました。(大学関係です。)

・印象に残つた発言。

① 十八歳大学、十五歳高校という考え方をするべきではないか。出たものがまた入りなおすこと ができるやすいように。

② やさしい、すなお、思いやりがある…」こうすることを教科学力のみでなく、広い評価の枠組をもちたい。

□・内容は、ほぼ予想通り。発言者(参会者)からの質問も予想通り。

・副テーマ「入試制度等をめぐって」の『等』の方に流れたか?

・「入試制度」に期待して参加した。ア・テストも含め、いろいろな考え方を聞いたり意見を述べようと思ったが、残念。

・話題として多くはあつたが、これは教員・組合・団体レベル。

・一市民として、草の根的な制度について意見を聞いたかった。
・もつと、一般者向けのレベルでのシンポジウムもほしい。

□・アチーブメントの是非を考えてほしい。

・入試一発勝負の方がよかつたように思うが…。

□・教育問題を考える時、以下の視点がクリアーされたらと思う。

- ① 教育を受ける自由、受けない自由の保障。（小学校より…）
 ② 教師側の単位の認定権の確立。

- ア・テストや選抜方式についてもつと突っ込んで欲しかったと思います。
- ・シンポジストのプリントの名前の順が気になりました。大学教授が先で、母親が最後で紹介された形の根拠は何なのでしょう。アイウエオ順でいいのではないでしょか。壇上では、話の進行の関係で別でしたが…。
- ・進路指導にあたつて、教師主導で行なわれすぎているのではないでしょか。指導より助言にとどめ、本人の決定にさせた方がよい。（中途退学者の数とからめて）
- 学校間格差の結果は、自然集団がうしなわれたことだと考えます。生徒が正常に育つ集団をいかに回復するか、これから努力するしかない。（高校教員）
- ・今まで、高校は選抜制があるということで入れなかつた子供達を、どうしていくかという事を考えていかないと『問う』ことにならないと思います。
- ・『障害』のある子も高校に行けることを約束して下さい。
- ・高校教師の会場発言のひどさ。高校は差別的だと思います。
- 障害児の全日制高校入学を是非実現させて欲しい。
- 高校問題は「制度改革」ばかり論じられる。「制度」があるから、「制度」ができるまで…と、「制度」という言葉は聞きあきた。「制度」ということで、今まで「障害児」といわれる子どもは、ずっと切り捨てられてきた。
- 「障害児」といわれる子どもが高校に入れないのは「制度」があるからではない。希望者全入と「障害児」の高校入学の問題は違う。差別の問題だ。

まとめにかえて

一九九二年一月二七日、逗子市図書館ホールで「高校教育の現在と未来を問う—神奈川の入試制度等をめぐつて—」公開シンポジウムが開催された。シンポジストには、中学校、高校、大学の各教員、さらに保護者の代表者を招き、それぞれの立場から高校問題に対する問題提起をしていただいた。後半では、フロアからの質疑応答も交えて、活発な論議がおこなわれた。

高校をめぐる最も大きな課題の一つは、「格差と序列」の問題である。シンポジウムにおいても、それをどのように突き崩していくかが、論点の一つになつた。

進路公開のできる学級づくりをめざす浅井さんからは、子どもたちを地域の高校に進学させる運動の重要性が主張された。一方、受け入れる側に立つ竹田さんからは、定員内不合格者を出さない運動の必要性が強調された。送り出す側、受け入れる側とそれ立場を異にするが、二人に共通するのには、制度改革を待つのではなく、現状で何ができるかを検討し、できることからまずは実践してみようという姿勢である。そういった地道な実践の積み重ねこそが、現実を変える大きな力になつていくと思われる。

中学三年生のお子さんの受験を通して高校問題に直面したという対さんからは、今日の偏差値教育に対する問題提起がおこなわれた。偏差値教育の元凶は大学受験にあるとし、子どもたちを受験競争から救うには大学の入学を無試験にすべきだというのが、対さんの主張である。その主張の現実性はともかく、高校問題が大学問題と連動している以上、こうした観点からのとらえ直しもまた必要である。高校問題の背景に関する黒沢さんの指摘も興味深いものがあつた。業者テスト排除の動きがみられ

るが、はたして偏差値はなくなるのかといった問い合わせから、企業社会と人材育成の問題、エリートとノンエリートの問題など多様な観点から独自の見解が明らかにされた。学校の負担をできるだけ軽くするという黒沢さんの持論には大いに共感する。

フロアからの注目すべき発言を二つ取り上げておきたい。一つは、高校の教師からの発言である。定員内不合格者を出さないという運動の理念は分かるが、学習意欲の低い子どもを入れると教師は過重な労働を強いられることになるという指摘であった。理念とはそもそも人々に生きやすさをもたらすためのものであるが、逆に生きにくさをもたらしているとすれば、理念そのものに問題はないのか、それと同時に教師の教育労働という観点から運動のあり方を検討することも大切ではないかなど、いろいろと考えさせられた。

もう一つは、障害をもつた子どもたちの高校進学をどう保障するかという、保護者からの問題提起である。これは、障害をもつた子どもだけでなく、不登校や外国人労働者の子どもの進学保障とも関連する、今日的課題であるといってよい。おそらくこの問題は、高校とは何かという根底的な問いかけを含むものであり、具体的には適格者主義をどうとらえるかといったことがらにかかわる問題である。

短い時間のなかでのシンポジウムであつたため、十分議論し尽くせなかつた問題が多く残つたが、それらについては高校問題をテーマにしたシンポジウムを再度開催する予定なので、そこでまた改めて論議してみるのもよいだろう。

最後に今回のシンポジウムを開催するにあたつて、多くの関係者のご協力とご援助をいただいたことに對し、深く感謝の意を表したい。

一九九三年六月一日

広瀬 隆雄

第三回教文研教育シンポジウム記録

高校教育の現在と未来を問う

——神奈川の入試制度等をめぐって——

1993年6月1日

発 行：神奈川県教育文化研究所

横浜市西区藤棚町2-197

神奈川県教育会館内

☎ 045-241-3531

印 刷：(有)神奈川教育企画

☎ 045-253-3435

KYOBUNKEN